

## 「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」から シェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その二

草 薙 太 郎

### 1. はじめに

文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い、富山大学人文学部の研究室に1990年頃から収集し、随時オンラインのデータベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから、米国の文化的特徴が読み取れる。それを『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その一<sup>1)</sup>「その二」<sup>2)</sup>としてまとめた。

その成果をもとに、シェイクスピア=ベーコン説を検証することができるとし、一連の論文発表を計画・実行している。そのことを以下にまとめて提示したい。

データベースの分類項目と対応論文は以下の通りである。(分類項目を列挙し、その後に対応する発表論文名を提示する。)

#### (1) 移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴

- (a) 心理学、臨床心理学などに関連するもの
- (b) 枠にとらわれない米国流自由研究
- (c) 映画に関連するもの
- (d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの

以上のうち(a)(b)を『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア=ベーコン説を検証する その一<sup>3)</sup>としてまとめ、(c)(d)を「その二」<sup>4)</sup>としてまとめた。

#### (e) 語学的考察に近いもの

---

1) 富山大学人文学部紀要第40号 (2004).  
2) 富山大学人文学部紀要第42号 (2005).  
3) 富山大学人文学部紀要第44号 (2006).  
4) 富山大学人文学部紀要第45号 (2006).

- (f) 実際に演じることからの論考
- (g) ホモセクシュアルに関わるもの

以上を『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その一』<sup>5)</sup>としてまとめた。この論考からシェイクスピア＝ベーコン説を検証することであぶりだされる米国の特徴と、「2001. 9. 11のテロ」以来、世界的な問題となっている「テロ対策」とが、深い関係にあることに重点をおいて論じた。

- (2) そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴
  - (a) 主として英国と関連するもの
  - (b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの
  - (c) 西欧文化全体と関わるもの

以上を本稿である『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その二』<sup>6)</sup>としてまとめる。

- (3) 競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする（フェミニズムが典型）圧力のある特徴
  - (a) フェミニズムに関するもの
  - (b) 社会学的な考察をするもの
  - (c) 政治に関わるもの

以上を『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その三』<sup>7)</sup>としてまとめる。

さらに、「テロ対策」との関連を特に考えなかった(1)(a)(b)を「その四」<sup>8)</sup>としてまとめ、(c)(d)を「その五」<sup>9)</sup>としてまとめる。

なお、一連の論考は、随時更新されたデータの、発表時での最新データに基いている。

---

5) 富山大学人文学部紀要第47号 (2007).

6) 富山大学人文学部紀要第48号 (2008).

7) 富山大学人文学部紀要第49号 (2008). (予定)

8) 富山大学人文学部紀要第50号 (2008). (予定)

9) 富山大学人文学部紀要第51号 (2009). (予定)

(a) 主として英国と関連するもの

さて、データベースの分類項目「(2) そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴」の細目である「(a) 主として英国と関連するもの」について考察する。

まず、以下にベーコン説検証が「テロ対策」と関わる論点を端的に示そう。米国学位論文によってアメリカでは「座右の銘の供給源」としての古典観が主流であることが分かる。これは実践を重んじる国柄から来ている。実践を重んじる人々は「座右の銘」的思考で自己を奮い立たせる。長い文章から微妙なニュアンスを読み取ることは不得意である。イラク戦争では「忠君愛国」の座右の銘で行動する日本を「主権在民」に変化させることに成功したように、「アラーの神の思召し」で動くイラクを「主権在民」に変化させようとして失敗したという思考になり、日本には成熟した民主主義が既に育っていたのにイラクにはそれが無いといった、いわば「長い文章から微妙なニュアンスを読み取る」思考が出来ないか、出来てもそれが行動基準にならない。また「座右の銘」だけに注目すればシェイクスピアとベーコンの作品の区別がつきにくい。ベーコン説は認の一手手前のような米国学位論文が多い所以である。そのベーコン自体「座右の銘」的思考を推奨する行動の人であり、その科学技術立国の思想がアメリカの建国に深く関わることも米国でのベーコン説圧力が強い原因でもある。

これらを、アメリカは大衆性を重視し、歴史的地理的文脈を外す傾向があるのに対し、英国はインテリを尊重し、歴史的地理的文脈重視の傾向があるとして、二つの対立軸に整理することも一見可能に見える。しかし英国にも大衆性はあり、逆にアメリカでもインテリはそれなりの尊重をされ、英米に限らず何らかの理想を目指せば、歴史的地理的文脈による拘泥を断ち切る必要が生じる。

上記の、二つの対立軸を設定する認識の上で、まず今後の国際問題を考えるなら、アメリカの「座右の銘」的思考一辺倒を修正し、「長い文章から微妙なニュアンスを読み取る」思考へ転換させるために英国のアメリカへの影響力行使が不可欠ということになる。

それは単純に言えば武力行使も辞さない対決姿勢からイスラムとの融和を図る姿勢への転換ということになる。この二つの姿勢をシェイクスピア論に翻訳すれば「シェイクスピア＝ベーコン」説を検討課題として許容する荒っぽさからシェイクスピアの柔軟性を汲み取る姿勢への転換になる。事実、英国政府はイスラムの聖職者に英国との融和をはかる説教をさせる政策をとり、シェイクスピアのイスラム的側面を強調する説教が生まれた。それが新たに「シェイクスピア＝イスラム教徒説」という論争の種を生んだ。

ここでいう「シェイクスピア＝ベーコン」説を検討課題として許容する荒っぽさの「荒っぽさ」には粗雑な判断という否定的な意味だけをこめている訳ではないことを断っておきたい。もし

そうならば、始めから「シェイクスピア=ベーコン」説を、検討さえ許されない妄説として否定することになる。ここでいう「荒っぽさ」とは近代文学に親しむ「繊細な感受性」の反対語として使いたい。

「シェイクスピア=ベーコン説」を検討課題として許容するアメリカの荒っぽさについて、これまでは歴史的地理的文脈を無視することを主体に取り扱ってきた。要するに十六世紀、十七世紀ロンドンに思いを馳せる「歴史的地理的感受性」の欠如なのだ。十六世紀、十七世紀ロンドンでのシェイクスピアとベーコンの活躍ぶりを想像すれば、二人が同一人物であるなどという考えは浮かぶはずがない、という批判であった。ベーコンは政治家として大法官として活躍し、しかも近代哲学の扉を開き科学技術の基礎を築いた。余人でもって替えがたい精力的な活躍ぶりに加え、もう一つ、余人でもって換えがたい精力なしにはありえない一連のシェイクスピアの作品を手がけるなどは不可能だとの立場である。

これと並んで近代文学に親しむ「繊細な感受性」の欠如を指摘する文学研究者の立場はもっと厳しい。

「繊細な感受性」で近代文学に親しみ、その文体から作者の人格を感じ取る人々にとって、シェイクスピア作とされる作品と、ベーコンを始めとした非ストラトフォード人説（シェイクスピアの作品はストラトフォード・アポン・エイボン出身のあの人物の作品ではないとする説）の候補にあがる人々の作品は、それぞれ別個の人格の手になるものである。従って「シェイクスピア=ベーコン」説など非ストラトフォード人説を検討課題として許容する人々は「繊細な感受性」を持たないいい加減な人々であり、文学を語る資格がない人々だとみなす立場である。

現在も英国と日本の学界の主流はその考え方であり、その考え方に立てば、アメリカの学位論文の大半は、いい加減な、文学を語る資格がない人々の論文だということになる。

けれど、そこまでアメリカを否定できるだろうか。

もう一度「繊細な感受性」を研ぎ澄ましてシェイクスピアを考える。ここに、この問題を考えるための一つの思考実験のようなアイデアを提示してみる。

例えば、ある青年が女性を思わず犯してしまったとしよう。その心理を詩、演劇、小説など文学で表現する場合を考える。ここでは演劇の台詞ないし小説の会話文として考えてみる。

「判断がつかなくなったのか、つい欲望に負けてしまって・・・」「頭が真っ白になって、もう好きだという思いのコントロールがきかなくなって・・・」など、様々な表現が考えられる。それは作品の状況設定や作者の文学的感受性によって様々だと考えられる。その様々な文体の微妙なニュアンスを感知し、それによって逆に文学研究者は作者の人格を感じ、作者を同定する。

しかし、例えば同じ場面をシェイクスピアだったらどう書くか考えてみる。

「私の中で理性と情熱が争い、情熱が理性を打ち負かしてしまったのでございます」

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

といった表現になるだろうと予測がつく。つまりシェイクスピアの文体は、表現すべき状況を概念でかなり「荒っぽく」整理し、概念を擬人化して争わせて心理を表現する。

これが「シェイクスピアが翻訳を生き延びる普遍性を持つ」といわれる秘密でもあると考えられる。

「判断がつかなくなったのか、つい欲望に負けてしまって・・・」「頭が真っ白になって、もう好きだという思いのコントロールがきかなくなって・・・」などの表現なら各国語に翻訳した場合ニュアンスの差が出て、ときに作品の本質が変わったりもする。

「私の中で理性と情熱が争い、情熱が理性を打ち負かしてしまったのでございます」という表現なら「理性」「情熱」と対応する語さえあれば各国語に翻訳可能であり、翻訳で作品の本質が傷つくことも、あまり考えられない。

すぐには「理性」「情熱」と対応する語が思いつかない我が国の古語を考えても、例えば「心のうちで『しっかりせねば』と『いとしゅうてならぬ』がせめぎあい、『いとしゅうてならぬ』が『しっかりせねば』を打ち負かしてしもうたんじゃわいの」といった歌舞伎風の表現を容易に思いつく。

思いつくけれど、「理性」と「情熱」に『しっかりせねば』と『いとしゅうてならぬ』が正確に対応するわけではなく、シェイクスピアらしさはかなり損なわれる。これは坪内逍遙の訳に散見する感覚だと思われる。近代的な概念語はシェイクスピアの訳にはどうしても必要である。その理由は後述する。近代的な概念語があることばへの翻訳ならシェイクスピアは翻訳を生き延びるのだ。

ただし、シェイクスピアらしさが損なわれた歌舞伎風の訳によって作者同定問題に重要な示唆が得られる。

歌舞伎の作者の同定はかなり難しい。つまり歌舞伎特有の定型的な表現があって、そこに作者の個性が埋没してしまい、少なくとも近代文学的「繊細な感受性」をいくら研ぎ澄ましても、作者同定には至らない面がある。

シェイクスピアの場合は歌舞伎と違って作品に盛り込まれた思想や表現が近代的な印象を与えるので、つい近代文学的「繊細な感受性」を研ぎ澄ませば作者同定に至ると錯覚してしまうのではなからうか。さらに歌舞伎特有の定型的な表現は歌舞伎という「ジャンル」のものだ。それゆえ「ジャンル」の中での個人の特定が困難ということになる。

「私の中で理性と情熱が争い、情熱が理性を打ち負かしてしまったのでございます」という「定型めいた表現」はシェイクスピアだけのものであって同時代のエリザベス朝演劇に多く見られるわけではないと、私は推定する。シェイクスピアと同時代の作家で、このような表現に出合ったことが、寡聞にしてないのだ。もちろん、この「定型めいた表現」は、「シェイクスピアの文体は、表現すべき状況を概念で整理し、概念を擬人化して争わせて心理を表現するものだ」

というアイデアに基づく。アイデアに従って私が捏造した「シェイクスピアの句」であって、シェイクスピア作品に実際にあたってみて、それに近い表現は数多くあるけれど、それそのものがあるわけではない。そもそも女性を犯してしまった青年の弁明などという場面はシェイクスピア作品にはない。この句に「シェイクスピアらしさ」を感じるかどうかで、近代文学的「繊細な感受性」では捉えきれないとする私のシェイクスピア文体分析に共感が得られるかどうかが決まる。つまり私のアイデアの当否が問われることになる。

もし私のアイデアが承認され、こうした句がシェイクスピアらしい句の定型だということになれば、シェイクスピアは一人で「シェイクスピア劇」というジャンルを確立し、一人で「シェイクスピア的定型表現」を編み出したことになる。しかし、それがストラトフォード出身の「個人」としてのシェイクスピアかどうかの問題になることになる。

以上の考察が認められるなら、「シェイクスピア=ベーコン」説を検討さえ許されない妄説として退ける近代文学的「繊細な感性」には、作者同定問題については、少しトーンを弱めていただく必要が出てくる。近代文学的「繊細な感性」に対立し、「シェイクスピア=ベーコン」説の検討を許容するアメリカ的「荒っぽさ」とつきあうことに、私は意義がなくはないと考える。

この「荒っぽさ」とは何かを、さらに検討してみよう。

「AとBが争ってBが勝った」という表現には近代文学的「繊細な感性」で何かを言える余地がほとんどない。この変化形として「AがBを支配する」といった表現も目に付く。このAやBにあたるのが近代的な概念語で、代表的なものは「理性」「情熱」「記憶」「自然」といったものである。これらを組み合わせ、どれがどれに勝ったか、どれがどれに支配されたかが語られる。かなり「荒っぽい」世界であって、この点に関する限り、近代文学的「繊細な感性」が介入できる世界ではない。

前稿『「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その一」<sup>10)</sup>の項目「(g) ホモセクシュアルに関わるもの」の中で、ベーコンの自然科学の論文には自然を人格化した上で、その人格へのサディズムがあるとするホモの観点からの近代文学、近代社会を分析したもの<sup>11)</sup>を紹介した。ホモの問題については本稿も関るので後述することにして、ここでは近代的概念の支配、被支配の関係が語られ、サディズムさえ指摘されるのがベーコンの哲学だということを指摘しておく。

これを踏まえて、『ハムレット』の中で有名な「情熱の奴隷」という言葉を考えてみよう。

---

10) 富山大学人文学部紀要第46号 (2007).

11) Patterson, Steven J., *Pleasure's Likeness, The Politics of Homosexual Friendship in Early Modern England*, (1997).

「情熱の奴隷でないような人間がいたら連れて来い」(Give me that man / That is not passion's slave) (『ハムレット』三幕二場) とハムレットは言う。「今は夜の何時?」(What is the night?) とマクベスに尋ねられ「夜と朝とが互いに自分の領域だといって争う時刻です」(Almost at odds with morning, which is which.) とマクベス夫人が答える (『マクベス』三幕四場)。

実はこの二つを合成して「私の中で理性と情熱が争い、情熱が理性を打ち負かしてしまったのでございます」(つまり私は「情熱の奴隷」になって彼女を犯した) という句をこしらえた。その上でさらにマクベス夫人の言葉を検討してみよう。

「理性」「情熱」「記憶」「自然」に「夜」「朝」が加わり、擬人化されて争う。その「夜」「朝」も近代的な概念語として考えてもよいかということがまず問題になる。

マクベス夫人の言葉を「もう夜明けも近い時刻です」といった風に意識はしない方がシェイクスピアらしいと私には感じられるし、多くの翻訳者がそうはしない。その理由は「夜」「朝」も近代的な概念語として擬人化されている印象をもたせ「理性」「情熱」「記憶」「自然」の仲間入りをさせた方が「近代哲学の背景がありそうな」迫力が出るからだとは私は考える。句の内容をいささかもじって、より正確に言えば、「近代哲学の夜明け」が感じられるからである。

つまり、このマクベス夫人の時刻感覚は「近代的な概念と、擬人化という、より古い感覚が争っているような」印象を与える。この「朝」は「ほらご覧、茜色のマントを着て東の丘を露を踏んで越えてくる」(But, look, the morn, in russet mantle clad, / Walks o'er the dew of yon high eastward hill:) ことにもなる (『ハムレット』一幕一場)。つまり「朝」は擬人化されるというよりエンブレムのように図像化もされるのがシェイクスピアの世界である。

こうした夜明けを表す『マクベス』『ハムレット』の表現を近代文学的な「繊細な感性」はどう捉えたであろうか。『マクベス』の場合は王殺しの犯罪に関する二人の会話でいつのまにか夜明けが近い時刻になってしまったという感覚、『ハムレット』の場合は見張りに立って幽霊を見る物狂おしい夜がようやく終わって朝を迎える情景描写と、ほっと救われた感覚の交じり合った表現に、シェイクスピアの天才を感じて「感動」を語ってきた。

シェイクスピア時代の舞台は昼日中に行われたため、夜や朝を示す言葉を台詞に入れる必要があったという演劇技術史的な知識を援用して当時の舞台を偲び、当時は様々な概念を擬人化したエンブレムがあるという美術史の知識を得て、「朝」が実際に茜色のマントを着て、露を踏み、丘を越えて歩くところをルネサンス絵画として想像もする。

しかし、これらはシェイクスピアが近代以降とは違う世界に属しているらしいという感覚を加味するのみで、作品ごとの情景描写の巧みに感動する感覚は、あくまで近代文学的な「繊細な感性」に捉えられたものというのが、これまでの英国、日本のシェイクスピア批評の主流ではなかったか。それはシェイクスピア研究が、どうしても英文学研究の枠内で行われる点も

関係している。

つまりシェイクスピアをワーズワース、キーツといった近代以降の詩人と並べ、さらにT.S.エリオットとも同列に並べ、「フランスの象徴派詩人の替わりにダンなどの形而上詩を読む」というT.S.エリオットの考え方に力を得て、シェイクスピアをあくまで近代文学的な「繊細な感性」で捉えうる射程圏内に置こうとするのが、「シェイクスピア＝ベーコン説」の検討を許容するアメリカ的「荒っぽさ」を批判する、この立場であった。

この立場の問題点は「文学的感動」を重視するあまり、作品ごと、場面ごとに適宜様々な観点を選び、体系だった分析を行わない点である。ハムレットは、人間の多くは「情熱の奴隷」だと言う。一方「何と人間はすばらしい作品なのか！何と理性において気高いことか！」(What a piece of work is a man! how noble in reason!) (二幕二場)と、これとはやや矛盾したことを言う。

シェイクスピアをあくまで近代文学的な「繊細な感性」で捉えうる射程圏内に置こうとする立場では、そうした矛盾はそれでいいのだとする。人間はときに「情熱」に支配され、ときに「理性」を持つ存在だといっているのだから、それで良いではないかという立場である。そこに一貫性がなくてもよいとする。

ハムレット自身「天と地の間にはなあ、ホレイショ、哲学の夢見だにしないものがあるんだよ」(There are more things in heaven and earth, Horatio, / Than are dreamt of in your philosophy.) (一幕五場)といっているのだから、一貫性のある哲学をシェイクスピア作品に感じなくてもいいのだというのが、シェイクスピアをあくまで近代文学的な「繊細な感性」で捉えうる射程圏内に置こうとする立場である。

しかし、この考え方は大きな矛盾をはらんでいる。まずシェイクスピアを除いて近代文学的な「繊細な感性」が尊重してきた詩人で、作品の背景に一貫した哲学のない詩人はいない。中でもT.S.エリオットくらい、この点をうるさくいった詩人はいない。そして近代文学的な「繊細な感性」が文学作品の作者同定に発言力があるとしたら、T.S.エリオットが「いやしくも二十五歳を過ぎて詩を書くものは・・・」とお説教してくれたように、伝統を踏まえ、自己の一貫した哲学を持つことですぐれた文学作品が書けるという信念に基づく。すぐれた作品を感知し、すぐれた作品の背景にある一貫した哲学と作者の文学的な人格を捉えられるから、近代文学的な「繊細な感性」が文学作品の作者同定をする資格があるのだ。一貫性のある哲学をシェイクスピア作品に感じなくてもいいのだとすれば、それはそのまま近代文学的な「繊細な感性」が文学作品の作者同定に発言力を失ったことを意味する。ときに人間が「情熱の奴隷」になり、ときに人間が「何と理性において気高いことか！」と評価されるのはよいにしても、そのさらに背景にある一貫した哲学を、シェイクスピア固有のものとして、具体的に系統だって説明し、証明した決定的なものは、まだないのではなかろうか。



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

シェイクスピア学者を中心に「シェイクスピアの哲学はこうだ」とする見解も数多く出された。けれど、それは十六世紀、十七世紀のイギリスを取り巻く世界観を包括し、ヘブライ・ヘレニズム文化のすべてを睨んだものである。「シェイクスピアの哲学は、その時代の哲学そのものだ」という主張では、作品の作者同定に何の意味もなさない。

近代文学的な「繊細な感性」にとって不愉快な「荒っぽさ」を感じるにしても、アメリカのシェイクスピア研究につきあう意義がなくはない。ギリシャ・ローマの古典学、聖書学に、相続法を中心に他の西欧諸国とは違う独自の発展をした法律学を加え、伝統的な教育課目を学習して「シェイクスピアの哲学は、その時代の哲学そのものだ」という主張に安住している英国の研究の主流に比べ、「荒っぽく」伝統を欠いて素人的な「手製の論理」を振り回す面があっても、シェイクスピア独自の哲学を探求しようとする緊張感はアメリカの博士論文には感じられる。次にその「シェイクスピア＝ベーコン」説を検討課題として許容する「荒っぽさ」の背景について考えてみたい。

「シェイクスピア＝ベーコン」説を検討課題として許容する「荒っぽさ」の背景にはアメリカの科学技術立国で市場経済と結びついた民主主義の理想を「馬鹿正直に」追う姿勢がある。

例えば先述の、ベーコンの自然科学の論文には自然を人格化した上で、その人格へのサディズムがあるとするホモの観点からの近代文学、近代社会を分析した論文は、ベーコンの政治的立場、シェイクスピアの作品分析に始まりミルトンの文学まで考察範囲が広い。英国や日本のシェイクスピア研究ではあまり考えられないカバーする範囲の広さは、アメリカが科学技術立国であることと関係している。

例えば科学技術の論文でCDプレーヤーの小さな技術的問題に関するものがあったとしよう。どんなに小さな問題でも、理論としてはアイザック・ニュートンからファラデーを経て、ときにアインシュタインを含む現代物理学までカバーする領域を論じることになる場合がある。「理系」の論文では、そうしたことは気にしない。

科学技術はニュートンからアインシュタインまで、歴史的変遷はあっても、現代直面する問題の解決には、すべてが一貫した一つの体系をなしていて、その体系に頼らないでは、どんな小さな問題も解決しない。その影響を受けて、カバーする年代範囲が広過ぎるとは感じないまま、ホモで文学を解析した論文の作者は、ベーコンからミルトンまでを追いかけてしまったのであろう。さらに科学技術は研究のアイデアが手製でも何でも、当面の問題を解決すればそれでよい。それが真の解決なら、意識しなくても科学史が扱う科学研究の伝統体系に合致している。理論研究なら、その伝統を未来にむけて推し進めることになる。

ここで「情熱」「理性」といった近代的な概念語を擬人化するシェイクスピア文体論との関係に戻れば、「情熱」「理性」といった近代的な概念語を組織的に結び合わせ系統だって理論化したのはベーコンである。シェイクスピア作品を支える「哲学」は何か推定することと、この

ベーコンの、きちんと論文の形で明示された「近代自然哲学」との関係は、追々、アメリカの博士論文と関連付けながら論じてゆきたい。

こうした考察は英米を比較することで、より実りあるものになると考える。

アメリカとはうって変わって「シェイクスピア=イスラム教徒説」を生む背景には英国の大英帝国時代の植民地の旧宗主国としてイスラムとの融和をはかった老獪さがある。「シェイクスピア=ベーコン説」の検討を許容するアメリカ的「荒っぽさ」を批判するというより、自分の国の偉大な詩人と哲学者だという意識から、十六世紀、十七世紀ロンドンに思いを馳せる「歴史的地理的感受性」の見地で、「シェイクスピア=ベーコン説」を退け、T.S.エリオットほどではなくとも、シェイクスピアが文学である以上、近代文学的な「繊細な感性」で捉えうる射程圏内に一応置き、ベーコンの政治、哲学、自然科学を整然と理論化する精神とは異なるとするのが英国の立場であった。(その考え方がシェイクスピアの故郷の研究機関のホームページに長く掲載されていたこともある。)

そうして確立されたシェイクスピアのイメージを、大英帝国の「国家詩人」として育み、同時に植民地化したアラブ世界で、他の英国的文物が支配者のものとして嫌われる中で、シェイクスピアだけは比較的受けが良いことを経験的に知って、イスラムとの融和の道具にしようとする。

ときに異民族統治の道具になり、ときに大英帝国の旗頭になるシェイクスピアの傾向は、その奥に何かといえば「シェイクスピア=〇〇説」を生む傾向があるシェイクスピア自身の文学的資質がある。つまり「シェイクスピアの哲学は、その時代の哲学そのものだ」という、作品の作者同定に何の意味もなさない主張が一応有効に見える資質である。一篇の日記も評論もなく、ギリシャ・ローマの古典を、深く知るのが知らないのか分からない巧みな引用をして、しかも庶民感覚を外さない劇作家なのだ。

ここでは仮に武力対決を緩和する手段として「英国のアメリカへの影響力に期待する」国際政治の政策を提案してみよう。しかし、本稿はシェイクスピア論が主眼であって国際政治に関り政策提言をすることに主眼があるわけではないことを予め断っておく。

「英国のアメリカへの影響力に期待する」国際政治の政策を可能にするには、米国学位論文に見られる英国への郷愁に期待することも考えられる。しかし、例えばアメリカが「ないもの」への憧れや郷愁からイギリス王室に興味を示しても、それは誤解の部分も多く、郷愁か必ずしも郷愁を抱かせるものの影響力にはつながらない。次にアメリカ側からの英国への郷愁とはどのようなものか考えてみよう。

シェイクスピア喜劇、マーロウの『フォースタス』などで魔法論を展開し、『嵐』分析で魔

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

法をかけることもとくことも人間の限界提示とする論考<sup>12)</sup>がある。枠にとらわれぬ自由な論考とも見えるが、ルネッサンスから王政復古期までの英国における科学と魔法と演劇の関係を考えれば西ヨーロッパ文化の伝統の存在は明らかである。

食欲イメージ（スパージョン引用）でスペンサー、デカー、ジョンソン、シェイクスピア、ミルトンを分析する論考<sup>13)</sup>は、すでに古典となったスパージョンの手法で西欧伝統文化にこだわる分析と考えられる。スパージョンという、グーグルに象徴されるコンピュータ社会の「検索文化」のさきがけと見られるものの、まだ「長い文章から微妙なニュアンスを読み取る」思考の一環であった時代への郷愁が感じられる。

オセロが武勇伝を語ったことが「唯一オセロがデズデモーナをたぶらかす魔術」だとオセロが身の潔白を示す。この場面を引用してシェイクスピアの「語り」全般を論じる論考<sup>14)</sup>は、米国ではなく英国の研究論文だといわれてもおかしくない伝統的手法を採用している。

『冬物語』の四幕でフロリッツェルがパーディタのダンスを評し“move still”ということを取り上げ、自然との関係を論じ、「言葉遊びの回復」という観点からのコーリッジ論を展開する論考<sup>15)</sup>も同様である。

これらをまとめてイギリスのどのような伝統をアメリカから語る論文だと言えいいのだろうか。魔法論で人間の限界提示、古典となったスパージョンの手法、「語り」全般、「言葉遊びの回復」・・・とキーワードを並べれば分る。それはイギリスに伝わるイギリス風の物語ということではなからうか。イギリスは世界でも特異なほど児童文学が発達した国である。子供時代から成人し老年に至るまで、本を友とし、本によって人生の知恵を学びながら一生を終えることも出来る。

その「人生論」の特徴は物語を友として生きるゆえに、決して「成功」を強制しないことである。例えば「プルーストによる人生改善法」<sup>16)</sup>は、作者の経歴（スイス育ちでイギリスの名門パブリックスクールからケンブリッジ大学卒業）と併せて、こうしたイギリス風人生論の特徴を表すとしてよいのではなからうか。二十世紀を代表する文学作品を読むことが人生の生き方を変え、生きる意味を見出させてくれるという論旨は他の国にはないイギリスの特徴ではなからうか。

---

12) Swedlow, Jessica Eve, *Art to Enchant: Shakespeare's magic*, (1990). 930.28||Sh||Sw

13) Yim, Sung Kyun, *Govern well thy appetite feeding imagery and Renaissance thought in Spenser, Dekker, Jonson, Shakespeare, and Milton*, (1990). 930.2||Y5||Go

14) Haslem, Lori Schroeder, *And thereby hangs a tale : stories and storytelling on the Shakespearean stage*, (1990). 930.28||Sh||Has

15) Kennard, *Lawrence Rochfort, Coleridge and Rehabilitation of Word Play*, (1995). MF||189||3

16) Botton, Alain de, *How Proust Can Change Life*, (1997).

これを言い換えれば、虚構との付き合い方が人生を左右するという論旨になる。つまり虚構のあり方、イマジネーションの質なのだ。行動を促す「座右の銘」的思考とは対照的である。

ここから発展し、「メアリー・ポピンズ」「魔女の宅急便」といった各国の児童向け作品で魔法と関わるものは多くとも、なぜ「ハリー・ポッター」が活字本とその映画化された作品を含め、あれほどの迫力を持ち爆発的な人気を博したかということを考えてみよう。これは必ずしもアメリカだけが大衆性を尊重するのではなく英国に内在する大衆性を論じることにもなる。

アメリカで魔法を扱っても一方でネイティブ・アメリカンの神話と競合して互いに魔力を失ってしまう面があるのではなかろうか。アメリカの自然は本来ネイティブ・アメリカンの神話が生きる世界であった。それをネイティブ・アメリカンというマイノリティーの保護区とそうでない地域に分けてしまえば、ネイティブ・アメリカンの神話からくる「魔法」は魔力を失う。そこに西欧から持込んだ神話的想像力で新しい魔法との関わりを求めても、その魔力は限定的なものになってしまう。

同様に宮崎駿とそのグループが、日本の様々な神話、民間伝承に取材し、西欧の伝説にヒントを得た作品を発表しても、自然と自然を把握する人のシステムに一貫性がないので、作品毎に違った「魔法」の形が現われ、少なくとも「魔法」に関する限り「ハリー・ポッター」の迫力にかなわない。

「ハリー・ポッター」には自然の捉え方も、それを把握する人のシステムにも、ひとつの一貫性がある。自然については「庭のイングランド」という考え方が当てはまる。「庭のイングランド」を舞台に英国パブリックスクールの雰囲気と厳しい訓練の実態を伝える「魔法学校」を描く「ハリー・ポッター」は、魔力を失う要素があまりない。その「魔法」は英国パブリックスクールからオックスフォード、ケンブリッジ両大学へという学歴の人々が大英帝国を建設した実態の迫力を考えれば、実力を行使した歴史もある「魔法」なのだ。うがった見方をすればそうしたエリートコースを外れた作者の、英国エリートを生む教育機関への思い入れやこだわりが作品に反映していないとはいえないのではなかろうか。

「狂人と恋人と詩人は、想像力（イマジネーション）については一つ穴のむじな、広大な地獄に収容しきれないほどの数の悪魔を見る」（『夏の夜の夢』五幕一場）とは、イマジネーション論でよく引用されるシェイクスピア作品の中で有名な言葉である。

これを「庭のイングランド」に住む人々に対する「英国パブリックスクールという厳しい訓練機関を生む、エリートが支配する共同体の締め付け」と、そこからの解放をめざす個人の戦いと捉えれば、「ハリー・ポッター」にも通用する。

シェイクスピア時代にパブリックスクールはまだ存在しなかった。しかし「エリートが支配する共同体の締め付け」があって、そのエリートを生むための厳しい訓練機関としてグラマースクールは存在した。

シェイクスピアの「狂人と恋人と詩人」とは「エリートが支配する共同体の締め付けから個人を解放する抒情詩的英雄」を描くために連帯する仲間であって、いわば精神的周縁人として誇らかに名乗りをあげているように私は思える。実際「エリートが支配する共同体とやや距離を措く」ことを徹底するのは、狂人と、ロミオとジュリエットのような自由恋愛で結ばれる市井の若い恋人たちと、抒情詩人ではなからうか。

さて、ここから英国にもある大衆性に切り込んでゆくには、どうすればいいのだろうか。それも英国は英国なりの大衆性といったものではなく、英米比較論に使えるような英米共通の大衆性といったものである。

例えば、このシェイクスピアの言葉と、ハードボイルドの象徴のように言われる「男はタフでなければ生きられない、優しくなければ生きる資格がない」との本質的な違いを考えてみるアイデアが浮かぶ。この言葉はレイモン・チャンドラーの作品で活躍するフィリップ・マローウの言葉で、森村誠一の「野生の証明」のキャッチフレーズとして有名になった。原文は、“If I wasn't hard, I wouldn't be alive. If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.”<sup>17)</sup>である。コーヒーを勧められた女性が「非情な男がどうしてそうも優しくなれるのか?」と問い、それに答えた言葉だ。“deserve”を「資格」という言葉を使って訳すほどの強い意味があるかどうかは疑問だ。私なら「非情でなければ命はなかったし、全く優しくなれなかったとしても、命はなかっただろう」と訳したくなる。主人公は「ハードボイルド」の主人公らしく非情な世界を生き抜き、女性にコーヒーを勧める「優しさ」を持つ。ただし主人公は女性から仕掛けられた「関係」を拒絶している。女性から仕掛けられた「関係」を拒絶する主人公の姿勢は、前作<sup>18)</sup>から引き継がれたテーマでもある。

この、原作のニュアンスから離れ、日本でだけ独り歩きしている言葉にヒントを得て、「権力闘争に打ち勝たなければ生き延びられない、恋愛をする優しさがなければ生きる資格がない」と言い換えて論じたい。

こう言い換えれば、この言葉はシェイクスピアの作品を貫く言葉でもあり、その大衆性の象徴になる。けれど、シェイクスピアの作品は大衆文学と言い切れない要素がある。その要素とは何かを検討したい。

文学との関係で大衆とエリートを区別するとき、この言葉くらい象徴的なものはないと思う。特に「恋愛をする優しさがなければ生きる資格がない」と考えることは、文学の観点に限定してのことながら、大衆であることの証ではなからうか。エリートは「資格がない」とまでは考えないと思う。

---

17) Chandler, Raymond, *Playback*, (1958), p.153.

18) Chandler, Raymond, *The Long Goodbye*, (1953).

この言葉と森鷗外の『舞姫』を比べれば、インテリと大衆の違いが明らかになる。

シェイクスピアが文学である以上、近代文学的な「繊細な感性」で捉えうる射程圏内に一応置き、ベーコンの政治、哲学、自然科学を整然と理論化する精神とは異なるとするのが英国の立場であり、その考え方がシェイクスピアの故郷の研究機関のホームページに長く掲載されていたこともあると先述した。この考え方からゆけば、ベーコンに近い「政治、哲学、自然科学を整然と理論化する精神」を持つ鷗外について考えてみたくなる。

『舞姫』の主人公は、結局はバレリーナの愛人を捨てて帰国した。『舞姫』から上記の「座右の銘」になぞらえた言葉を考えるとすれば「インテリは知力でもってタフに活動しなければ生きられない。優しくなければ生きる資格がないとの非難をはねのけ、虚構による救いを援用しつつ、ときに国家百年の計の前に個人的な喜怒哀楽を犠牲にし、いわゆる民衆を裏切ることをしても、あくまでタフに生きる」といったことになる。

国家を背負うインテリのエリートの考え方はそのようなものだと思う。森鷗外もベーコンも、ともに「理工系」で、碩学で、国政に関与したインテリであり、エリートであった。

こうした見方に立ってベーコンの見解を検討してみよう。

ベーコンには「愛について」というエッセイがあって、古代ローマの偉人も例にあげ「愛」の見地での正確な人生鳥瞰図を描こうとする。喜劇の主題で悲劇の主題にもときどきなると指摘し、同時代の演劇への造詣の深さも示す。「愛」について、様々な人生の局面を知っているという点で、決して「愛」を否定してはいない。しかし、「愛」を「偉大な人で狂気というほど愛にのめりこんだ人はなく、この弱点といえる情熱は、偉大な精神、偉業をなすことからは除外されている」(ESP版からの拙訳。以下、同様。)と規定する。

この言葉と先述のシェイクスピアの言葉を組み合わせ、以下の一見シェイクスピア風の場面を作ることができる。『アントニーとクレオパトラ』の中で言及があって、実際にはないアントニーとオクタ비아ヌス・シーザーの決闘場面である。

アントニー：さあ来い、小僧。剣さばきを見せてやる。

シーザー：黙れ、おいぼれ。

二人戦い、シーザーがアントニーを倒す。

シーザー：死んでしまえばあっけない最期だ。昔は英雄だったが、英雄には似つかわしくない情熱の奴隷になって、恋人から、果ては狂人になってしまった。クレオパトラと一緒に丁重に葬ってやれ。詩人をよんで立派な墓碑銘でも刻んでやれ。詩人は、この比類ない恋人の仲間だ。立派な墓碑銘を考え付くだろう。

これはオクタビウス・シーザーをベーコンの立場にし、詩人シェイクスピアとの関係を分かりやすく示したもののつもりである。

よく「シェイクスピア=ベーコン説」にある程度理解を示すタイプの議論に、シェイクスピア作品にはベーコンの哲学的言説がちりばめられているというものがある。しかし、実際のシェイクスピア作品についていえば、決して「ベーコンの言説そのもの」がちりばめられているわけではない。

「英雄には似つかわしくない情熱の奴隷になって」という風に「ベーコンの言説そのもの」を入れ込んでシーザーがアントニーを評する場面を作ると、そうした作品を実際のシェイクスピアの作品で探すとすれば、『アセンズのタイモン』かもしれない。

『アセンズのタイモン』で、「詩人」も登場し、全体がベーコンの『エッセイズ』の主張である虚栄、名声などを警戒せよという趣旨に合致している。ベーコンの「虚ろな栄光について」「名声について」を読めば、しかしベーコンが実際の政界、法曹界でのことを意識し、自分自身ある程度名声を得た立場であることを踏まえて論じていることがわかる。「名声について」の冒頭で「詩人は名声を怪物にする」とし、ときに優雅に、ときに重々しく語り、おそらくは「詩人が劇場で派手に飾り立てる名声」を描写した上で、次々に「怪物としての名声」を自らも敷衍する。けれど、途中で「詩人のスタイルに汚染される」ことを警戒し、実際の政治は少し違うということも言う。この未完のエッセイの途切れた部分まで読むと、ベーコンが「名声」を演劇や古典の中のものだけではなく実際に自分の身の回りにあるものとして感じていることが、伝わってくる。これはその意味で劇作家批判でもある。

『アセンズのタイモン』は、少なくとも現在において集客が期待できるという意味では成功した作品ではない。その理由は、上記の思考実験で創作した場面と同じように、「情熱あってこそそのシェイクスピア作品」なのに、作品全体が持つ情熱を冷やしてしまうような印象を与える言説が頻出するからではなかろうか。それはあるいはシェイクスピアの楽屋落ち的な本音が現れた作品かもしれない。

しかし、だから『アセンズのタイモン』について「シェイクスピア=ベーコン説」が成立することにはならない。その理由は「名声について」に実際に政治に携わる立場からの劇作家批判があるからだ。

ベーコンが「偉大な人で狂気というほど愛にのめりこんだ人はなく、この弱点といえる情熱は、偉大な精神、偉業をなすことからは除外されている」と言ったことに対し「私は詩人であり、愛の詩人であり、狂気というほど愛にのめりこむ詩人である」と半ば居直り、狂人、詩人、愛にのめりこむ性質のあるものとしての人間宣言をしたのがシェイクスピアの言葉だと思う。さらに「イマジネーションとは何か」を突き詰めたベーコンの論文に触発され「イマジネーショ

ン論」のような言説を展開しながら、哲学的にはほとんど何も言っていないレトリックになっている。

ここに現れたシェイクスピアの「哲学」は、「恋愛する優しさを生きる資格としたハードボイルドのもの」と、さして変わらない。それだけを見る限り決して他人の哲学を借りて文学を創造したわけではない。また、それだけを見る限りシェイクスピアは大衆文学作家なのだ。ただし、ベーコンなどのインテリの議論に対する「身構え」を巧みに作品にちりばめることをした。

「偉大な人で狂気というほど愛にのめりこんだ人はなく・・・」という言葉についていえば、少なくともベーコンが古代の英雄に学び、それを国家統治の参考にしたい思いの強さと迫力という「身構え」はシェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』に組み込まれている。しかし実際の言葉をちりばめてみれば、これはシェイクスピアの世界には異質過ぎると気づく。

つまりシェイクスピア作品にちりばめられているのは、『夏の夜の夢』のイマジネーション論のように、インテリの議論の持つ「身構え」や、それに対するシェイクスピアの反応という「身構え」のみである。このことは、ベーコンだけではなくシェイクスピアに何らかの影響があったインテリのサロニックな集まりでの議論はすべて当てはめることが出来る。

しかもその「ちりばめ方」が巧みなため、「影響」という形ではなく、シェイクスピア自身の血肉化した「哲学的言説」に見えるのである。『夏の夜の夢』のイマジネーション論でいえば、シェイクスピアは単に「イマジネーション論」の中で「狂人、恋人、詩人は想像力が豊かだ」と述べたに過ぎないのに、その契機になったベーコンのイマジネーションを巡る哲学がまるごと血肉化してそこにちりばめられているような錯覚が起きる。その結果「シェイクスピア＝ベーコン説」が情熱をこめて語られることになる。そこに何か背景があれば、その情熱に力がこもる。

その背景もベーコンに内在するものがあって、それは当時の伝統的な「知」の体系への反発、職人の「知」を取り込む新しい「知」の創造、自然科学の祖としての立場などであった。つまり「職人との共感」「科学技術との関連」がポイントであって、これらはアメリカと相性が良い。

アメリカで「シェイクスピア＝ベーコン説」が盛んな背景は以下の通りである。

アメリカは実際に独立戦争を戦ってイギリスから独立した。英国の「エリートが支配する共同体の締め付け」そのものを何とかした、ベーコンの思想的子孫なのだ。そして「何とかした」結果、英国の特徴ばかりか各国の特徴をボーダーレスな世界に解体するアメリカという存在の先祖となったのが「国家を担う」意識が強いベーコンであり、大英帝国の発展につれカルトの教祖から「国家的詩人」の地位を得たのが「国家的共同体の締め付けから逃れ狂気と美を追求した庶民感覚のある」シェイクスピアであったのは皮肉なことでもある。

しかし、シェイクスピアの演劇は、その前の『アーサー王物語』などキャクストンの印刷術で活字になった物語を、さらに舞台で観たいというロンドン市民の要求から来ている。過激な



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

恋愛も、恋愛の自制も、本を友とすることで適度な調和を得るのがイギリス流人生論だといえる。

恋愛の悩みを悩みきり、恋愛する「優しさ」を「生きる資格」とするのが大衆なら、悩みを虚構にゆだね、本を読むこと、本を書くことで解決しようとするのがインテリといえる。本を書くことで悩みを解決することを「詩に詠じ歌によみ」「其概略を文に綴る」と表現したのは森鷗外であった。

「若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなむ。これのみは餘りに深く我心に彫りつけられたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人も無し、房奴の來て電気線の鍵を振るには猶程もあるべければ、いで、其概略を文に綴りて見む。」と書かれた『舞姫』の創作動機は恋愛の悩みの救いを虚構に求めることであった。それが、このようにはっきり作品中で宣言されている。

イギリス流人生論はこの意味で大衆とインテリの相互作用を常に目指す。

その例にもなる「ハリー・ポッター」は、魔法と若い男女の成長が主題としても、その「魔法」がパブリックスクールの雰囲気の中で「科学技術」とイメージが重なる面がある。その上で、この作品は大衆にアピールする。

ここで「男はタフでなければ生きられない、優しくなければ生きる資格がない」という、レイモン・チャンドラーの作品で活躍するフィリップ・マーロウの言葉、森村誠一の「野生の証明」のキャッチフレーズとして有名になり、原作のニュアンスから離れ、日本でだけ独り歩きしている言葉をもう一度持ち出したい。

敢えて「優しくなければ生きる資格がない」とまで訳して森村誠一の「野生の証明」のキャッチフレーズとして有名になり、原作のニュアンスから離れて独り歩きしていることには、しかし意味がなくはないと思う。いわゆる体制側エリートとその正義感に対し、「はみ出し者のワル」と「ワルはワルなりの正義感」を突きつけるところがチャンドラーの作品にはある。こうした側面を我が国で探せば、安部譲二とその作品ということになるのではないか。チャンドラー作品の主人公フィリップ・マーロウは違法行為をしても悪人を処罰し、女性に言い寄られても筋の通らない「関係」を拒否し、体制におもねることも、金の誘惑に負けることもない。

「はみ出し者のワル」と「ワルはワルなりの正義感」はシェイクスピア作品にも描かれている。『ヘンリー四世』の第一部、第二部に描かれるフォールスタッフとその仲間であるハル王子（皇太子時代のヘンリー五世）の「組み合わせ」である。

この二人を「組み合わせ」なければ「はみ出し者のワル」と「ワルはワルなりの正義感」を描くことにはならない。フォールスタッフは確かに「はみ出し者のワル」であるけれど、「ワルはワルなりの正義感」があるとはいえない。「ワルはワルなりの正義感」を意識はするかもしれない。けれど、行動としてはその逆を行く。徹底してモラルを拒絶する。チャンドラー作

品の主人公フィリップ・マーロウが女性に言い寄られても筋の通らない「関係」を拒否し、体制におもねることも、金の誘惑に負けることもないとすれば、フォールスタッフは自ら不倫関係を求め、体制におもね、他人の手柄を横取りする。

ハル王子は逆に皇太子時代にフォールスタッフたちと付き合い合うことで「はみ出し者のワル」と「ワルはワルなりの正義感」を学習したのかもしれない。フォールスタッフとハル王子を組み合わせ、一人の青年の成長物語として読めばチャンドラーとの関連がよく分かる。

これは本から人生の指針を汲み取る大衆とインテリの相互作用を常に目指すイギリス流人生論の例にもなる。古くは民間伝承の形で、活字が発明されて以降は本の形で、イギリスは数限りない「若者の成長物語」を生み出してきたし、これからも生み出し続けるであろう。

けれどハル王子の場合、王位につくことで、もはや「はみ出し者」とはいえなくなる。

そして、その瞬間に、シェイクスピアの『ヘンリー四世』二部作をもはや支持しなくなるという評者もいるほどだ。

つまり敏腕刑事が悪を懲らすのはよいにしても、そのキャラクターによって、体制の締め付けが強化されるか否かに大衆は敏感である。体制による懲罰ではなく、ときに「ワル」の違法なリンチを大衆が期待する場合があるのは、そのせいだ。シェイクスピアの『空騒ぎ』では「犬のおまわりさん」の先祖ともいえるドグベリーが大公の弟の陰謀を摘発する。それなりに敏腕といえる刑事の活躍で、作品全体が悲劇に終わらねないところが救われる。そのキャラクターがコミカルで大衆に親近感を抱かせ、その敏腕ぶりを体制の締め付けとは感じさせない。敏腕刑事には思えないとぼけた雰囲気は、チャンドラーのフィリップ・マーロウというより刑事コロンボの先祖かもしれない。

そうしたキャラクターを創造し、体制の締め付けに敏感な大衆への配慮ができるシェイクスピアが、なぜかハル王子を突然冷たいエリートに変身させている。ことに王位についたとたんフォールスタッフを拒絶する冷たさと無責任な感覚は森鷗外の『舞姫』の主人公がバレリーナを切り捨てる冷たさに似通う。

つまりシェイクスピアは「国家百年の計を意識した正義感を持つ体制側エリート」と、そのアンチテーゼであるはずの「はみ出し者のワル」と「ワルはワルなりの正義感」と両方を作品化した作家であることになる。

喩えていえば森鷗外と安部譲二が一人の作家の中に生きていることになる。こんなことが可能なのだろうか。

このことを考えるために「狂人と恋人と詩人は、想像力（イマジネーション）については一つ穴のむじな、広大な地獄に収容しきれないほどの数の悪魔を見る」という句の「広大な地獄に収容しきれないほどの数の悪魔」とは具体的には何を指すのだろうかと考えてみる。

それは『ヘンリー六世』三部作に始まり薔薇戦争を描いたシリーズの、残酷な処刑あり、陰

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

謀あり、可憐な女性の略奪あり、女豹のような女帝の残酷な采配ありの「仁義なき戦い」に登場する人物たちではなかろうか。

ここで「仁義なき戦い」という言葉を使ったことは、単なる比喻ではない。史実においても、一説には薔薇戦争は当事者が傭兵を雇っての抗争であって、一般市民は疲弊せず、英国の国力はこの間にむしろ伸びたともいわれる。つまり「素人衆には手を出さない」モラルがあるヤクザの抗争に近かったとも考えられる。

シェイクスピアの薔薇戦争シリーズは、作品そのものについても「ロンドン塔での処刑」「王冠の重み」「国家とは何かを絶えず問う姿勢」といったものに幻惑されて何か高尚な歴史物語のように考えてしまう。その側面がないとはいえない。けれど一方でヤクザやマフィアの抗争と違わない内容はふんだんに盛り込まれている。権力を求め、陰謀をめぐらし、邪魔者は容赦なく始末し、美しい女性を、その夫を殺して奪い、利用価値がなくなれば捨てる。考えてみればヘンリー五世になったハル王子の物語も、もともとそうしたシリーズの一環として描かれたものであった。

ハル王子がヘンリー五世になってフォールスタッフを切り捨てたことだけに限れば、それで『ヘンリー四世』二部作を支持しなくなる評者もいるというのは過剰反応ではなかろうか。近代国家の「王冠の重み」「国家とは何かを絶えず問う姿勢」を考えてしまうのでハル王子が体制側に変身したように感じる。まだ当時の「王冠の重み」「国家とは何かを絶えず問う姿勢」といっても、それほどの重みはなく、むしろ重みがないからこそ薔薇戦争は起ったともいえる。ヤクザかマフィアの若年寄が首領に昇進したとたんに関友のチンピラを一人切った程度に考えればすむことともいえる。もちろん、それは一面である。

ハル王子がヘンリー五世になって体制側になったという問題は、一面で軽く見ることもできるものの、依然として後世に残る問題でないとはいえない。

ここで、述べたことを三つの世界に整理してみたい。まずベーコンという近代哲学の祖で科学技術発展の基礎にもなった著作があり、国政に関与して詩も書く存在がある。陰謀、裏切り、残酷な処刑を伴う権力闘争、可憐な美女と女豹のような女帝が登場する薔薇戦争シリーズがある。フォールスタッフという当時の騎士の価値観を徹底的にひっくり返したような人物造形がある。

この全く様相の異なるものを、どうシェイクスピアが継ぎ合わせ、シェイクスピアという一人の作家に宿ることとなったのだろうか。

まず陰謀、裏切り、残酷な処刑を伴う権力闘争、可憐な美女と女豹のような女帝は、薔薇戦争時代ほどではないにせよ、その残影がエリザベス朝にもあったと考えられる。エリザベス朝もそうした要素に事欠かない。エリザベス女王自身、危うくロンドン塔での処刑をまぬがれ、また、その治世中に残酷な処刑を命じたりもしている。

またフォールスタッフのような人物造形は、喜劇役者が尊重される伝統の中で生まれたともいえる。「ワルはワルなりの正義感」をハル王子と組んで演出するフォールスタッフの人物造形は、落語家、「ワル」の影があるコメディアン的なタレントなら誰にでもある要素である。そうした大衆を意識した文学の要素をシェイクスピアの環境から論じることは比較的易しい。問題は、そこにどうベーコンないしベーコンを中心としたインテリグループの議論が関るかである。ハル王子がヘンリー五世になって体制側になったという問題もここに関わる。

ベーコンとシェイクスピアに接点があったかどうかは分からない。シェイクスピアとサウサンプトン伯爵とに接点があり、サウサンプトン伯爵とエセックス伯爵とに接点があった。エセックスの反乱の際に、エセックスの処刑、サウサンプトン伯爵の入牢にベーコンが関与したことは確かだ。

当時の国政に関与した貴族・インテリグループを考えると、確実なシェイクスピアとの接点はサウサンプトン伯爵である。サウサンプトン伯爵に捧げられた長詩と、一説にはサウサンプトン伯爵がモデルとも言われる『ソネット集』から何が読み取れるだろうか。ストラトフォードの田舎からロンドンに出たシェイクスピアの、故郷のグラマー・スクールである程度知性を鍛えられてはいたものの、国政に関与した貴族・インテリグループと接触して、戸惑い、半ば身を低くして接近しつつ、半ば反発も感じる意識は垣間見られる。

『ソネット集』から汲み取れるのは、モデルがサウサンプトン伯爵だとすれば、伯爵家の武張った格式の高さに、シェイクスピア自身がモデルと考えられる詩人がひれふすと同時に、その冷血ぶりに反発も感じたということである。

サウサンプトン伯爵にひれふす感覚は、薔薇戦争シリーズを書く際に、シェイクスピアの創作の源泉とはいわないまでも、それに近いくらい役立ったと思われる。薔薇戦争の戦う感覚は、いくらソースになる文献を精査しても庶民にはつかみにくい。実際に馬に乗り、武器をとって戦いに出て行く家柄に生まれ、エセックス伯爵の反乱に加担もした美少年に接触し、かなり惚れ込むことで、シェイクスピアの薔薇戦争シリーズは「本物」の迫力を得たと考えられる。

国政に関与した貴族・インテリグループの冷血ぶりに反発も感じたということは、シェイクスピアの作品に、戦争の迫力とは別に、大きな国を動かす政治の持つ冷たさ、いやらしさについて「本物」の迫力を付与した面があると思う。

エセックスの処刑に際しては、民衆に人気があったエセックスを英雄視させないための配慮がなされ、ベーコンは報酬を得てそれに加担した。その影が『ハムレット』のクローディアス、ポーロニアスの「工作」に感じられるとしたら、あまりにベーコンとシェイクスピア作品を結びつけ過ぎるだろうか。当時の民衆がエセックスに拍手を送り、ベーコンの政治的冷たさを嫌悪したことは、かなり確かだ。この民衆の感覚を、かなりエセックスをモデルにした風のある『ハムレット』にシェイクスピアが反映させなかったとは考えにくい。この点は後に『アントニー

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

とクレオパトラ』のオクタビウス・シーザーに反映しているかもしれない。恋愛に国政を危うくさせる表題の二人に対し、「政治の持つ冷たさ、いやらしさ」を代表する人物がオクタビウス・シーザーなのだ。「愛」を分析しながら「愛に狂うのは偉大ではない」とベーコンがエッセイで明言したことに対し、「愛に狂うアントニーとクレオパトラ」「愛に狂わないオクタビウス・シーザー」を対照的に描く作品でシェイクスピアが応えたとは考えられないだろうか。「愛に狂う表題の二人」に対し「愛に狂わないオクタビウス・シーザー」は、やや小ぶりに「偉大さにおいて少し劣る」感じで描かれている。

国政に関与した貴族・インテリグループには後に科学技術に発展した要素と、「理系」（ベーコンの「燃焼論」だけでなくハーベイの血液循環説など、後世から見れば「理系」になる発見が当時のインテリグループには多い）ゆえの「人生論」の要素もあって、それがシェイクスピア作品に反映していると思われる。それは追々触れることにして、ともかくも述べてきたような形ならシェイクスピア作品にベーコンを中心にしたインテリのグループの議論がちりばめられていることは考えられる。

行動するエリートで、そもそも「座右の銘」的思考を始めたのはベーコンであった。その科学技術立国の夢を半ば実現した子孫たちともいえるアメリカから、こうした大衆感覚とインテリ感覚が混じり合ったイギリス流人生論への郷愁も見られる。しかし、そこには誤解も多いことを次に見てゆこう。

『ハムレット』の劇中劇などの上演史、役者史を中心にした論考<sup>19)</sup>は実践重視といいながら英国の歴史に深くこだわっている。18世紀初頭ロンドンでは、ただ正統性に無関心であることからシェイクスピア喜劇についてショービジネスへの移り変わりが起こったとする論考<sup>20)</sup>、シェイクスピアに影響を与えた宮廷劇的な作品を読んでみた、という論考<sup>21)</sup>も同様である。

ギャリックの名演技やマローンのテキスト校訂によって次第に「正統性」が確立していった状況への、感覚を伴った理解がないまま、「ショービジネスか正統性か」といった、まるでアメリカの大学で講座や教員を選択するような思考が、「宮廷劇」「正統性の支配」といった伝統の重みによる「エリートが支配する共同体の文化的締め付け」が存在しない米国から生まれる。結局シェイクスピア劇の「正統性」を理解しないための誤解に近い論文になる。

インテリの議論に対する「身構え」を巧みにちりばめた大衆文学という見方からシェイクスピア劇の「正統性」を解析することが出来る。シェイクスピアの同時代にはベーコンを中心と

---

19) Macdonald, Paul Alan, *Macready, Irving, and Beerbohm-Tree: Image, and the Play Scene from Hamlet*, (1996). MF||189||4

20) West, Katherine Noel, *All this we must do, to comply with the taste of the town: Shakespearean Comedy and the Early Eighteenth-Century Theatre*, (1995). MF||189||6

21) Nolan, Michael, *A Modern-Spelling Critical Edition of The Thracian Wonder*, (1993). MF||189||9

するインテリグループでの議論がシェイクスピア作品にちりばめられた「身構え」の対象であった。それが王政復古期以降、ドライデンのシェイクスピア復活論になり、マローンのテキスト校訂や、パブリックスクールを中心とし、王立協会、王立研究所を含む科学技術のロンドン富裕層への説明や、シェイクスピアを「国家詩人」とし、シェイクスピア・カルトを生むまでの様々な議論を包含するものとなって、次第に形成されていったのがシェイクスピア劇の「正統性」ではなかろうか。シェイクスピア作品にちりばめられた「身構え」の対象がパブリックスクールからオックスブリッジへ入学する英国エリート文化であることを意識して、その上でシェイクスピア作品を捉えることがシェイクスピア劇の「正統性」の確立なのだ。

アメリカにはこうした歴史的経過を絶えず意識する伝統がない。歴史の成熟の問題を選択の問題に置き換える傾向がある。その結果シェイクスピア劇の「正統性」をインテリの議論に対する「身構え」とし、その「身構え」を巧みにちりばめた大衆文学としてのシェイクスピアを金儲けの道具にするショービジネスとは二者択一のものとして捉える。

ただし、こうした誤解の仕方は国際政治に重要な示唆を与えてくれる。「ショービジネスか正統性か」といった思考は、「ショービジネスから正統性が生れた」歴史的過程を無視している。これは「独裁制か民主制か」という選択の問題で考えてしまい、戦争を仕掛けて日本を「軍部の独裁制」から「戦後の民主制」に選択を変更させたから、同じように戦争を仕掛けてイラクを「独裁制」から「民主制」に「選択」を変更させて切り替えられると考えることに酷似している。考えてみれば、アメリカには他の国のように為政者の独裁制から長い時間をかけて民衆が民主主義を勝ち取った歴史がない。そもそもの建国から、植民地にとどまって英国に支配されるか、独立して合衆国をつくるかは、一種の「選択」の問題であったのだ。また奴隷制廃止にしても、北部が南部に戦争を仕掛けて「奴隷制廃止」の「選択」を迫って実現したことであって、黒人奴隷が長い闘争のすえに奴隷制廃止を勝ち取ったわけではない。

とはいえ、米国シェイクスピア研究博士論文のすべてが、このように英国に強い関心を抱きながら英国をもうひとつ理解していないと感じさせられるわけではない。ジェームズ一世の長男ヘンリーへの国民の期待と『ペリクリーズ』を結びつけ、時代の気分を捉える論考<sup>22)</sup>は十八世紀英国に立返らせてくれる。

カトリックは集団、プロテスタントは個人という常識をくつがえし、英国教会の祈りの分析から、英国教会の方が集団での祈りをコモン・プレアで強制し、意味のわからないラテン語祈祷に参加するだけのカトリックより集団性があることを主張する論文<sup>23)</sup>がある。この見地で

22) Early, Mary Jane, *Cymbeline as Occasional Play*, (1995). MF||189||33

23) Targoff, Ramis D., *The Subject of Prayer: Models of Public Devotion in Early Modern England*, (1996). MF||194||10

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ジョージ・ハーバートやミルトンの詩などを分析もする。

自殺を論じながら、オフィーリアなどはあまり問題にせず、スペンサーの詩、リチャード三世の墮落、ミルトンの詩を問題にし、英国教会の教義を問う論文<sup>24)</sup>がある。神の墮落に言及するシドニーとルターを対比させる。演劇的誇張を廃し、キリスト教国に生まれた人間の絶望を正面から見つめて英文学を眺めたらこうなるかという点で興味深い論考である。

これなどは英国教会を強調すれば英国への郷愁になり、キリスト教全般と考えれば「(c) 西欧文化全体と関わるもの」に分類すべきものになる。ここでは英国教会特有の問題を捉えたものが多いので、本項目「(a) 主として英国と関連するもの」に分類する。

この項目は英国とアメリカの混在という複雑な要素があるので、分かりやすく考えるために、「庭」を問題にして、ここまでの議論を整理してみよう。

『リチャード二世』で庭師も登場し、イギリスという国が庭に喩えられ、国家統治の技術が造園術になぞらえられる。これまでインテリと大衆を区別してきたことに、庭師のような職人が加わると問題が複雑になる。

科学史家によれば、「人間の知識と力とは合一する」（「知は力なり」）というF. ベーコンの言葉もまた、当時ロンドンで進行していた学者と職人との結合の運動を哲学的にいい表わしたものであった<sup>25)</sup>ということになる。

職人の「知」は、インテリと大衆という区別の下ではインテリには属さず、むしろ庶民の知恵と考えられてきた。しかし、ベーコンは、先述のようにギリシャ・ローマの古典と聖書学という、当時のインテリの「知」（その伝統は今なお英国に受け継がれている）の体系に若い頃から反発し、職人の「知」を取り込む新しい「知」の創造に意欲を燃やしていた。実験観察を重視し演繹だけでなく帰納法的な考え方も取り入れ、自然科学の祖としての立場もベーコンのものである。それが現代の科学技術につながってゆく。

チャンドラー、森村誠一をヒントに「権力闘争に打ち勝たなければ生き延びられない、恋愛をする優しさがなければ生きる資格がない」という言葉を考えれば、それが「シェイクスピアの大衆文学的側面」を表すことをすでに述べた。同時に、シェイクスピアにはベーコンなどのインテリの議論に対する「身構え」を巧みに作品にちりばめることをしたとも述べた。

それは「イマジネーションとは何か」というベーコンの議論を『夏の夜の夢』に取り込んだことに現れていそうなこともすでに指摘した。

『夏の夜の夢』は、「イマジネーション論」に続いて、市井の人々が演じる素人演劇が披露さ

---

24) Bohach, Gretchen Stockton, *Desperate Measures: Spenser, Shakespeare, Milton and the Renaissance Man of Hell*, (1996). MF||194||11

25) 山崎俊男他編纂、『科学技術史概論』, (オーム社,1978), p.64.

れる。石垣だの月だのライオンだのを職人たちが演じ、ご婦人方を気遣ってやたらに優しいライオンを登場させたりもする。「狂人と恋人と詩人は、想像力（イマジネーション）については一つ穴のむじな、広大な地獄に収容しきれないほどの数の悪魔を見る」ほど、唐突（それまで詩人論を展開したこともなければ、展開しそうな人物の発言という意味で）ではないにしても、この場面も観客や演出家、俳優を戸惑わせる面がある。

正直言ってあまり面白い場面ではない。腹を抱えて笑える程のことはない。何より魔法、妖精、恋の気まぐれと不思議を描いた作品のテーマと、どこでどうつながるのか、よく分からない。もちろん演劇に「インテリ」の立場から傾倒し、「演劇におけるイマジネーションとは何か」を追求する演出家、俳優、演劇好きの観客にとって、我が国の狂言にも似た「演ずることの原初的感覚」がそこで体験できると理屈を付けることはできる。

そうは考えても、せつかく魔法、妖精、恋の気まぐれと不思議を描いた作品世界に、あまりに拙い素人演劇を継ぎ足すことの違和感は消えない。ギリシャ・ローマの古典と聖書学への反発、職人の「知」を取り込む新しい「知」の創造というベーコン哲学の側面をシェイクスピアが取り込んだこととの関係を考えてもよいのではなかろうか。

この場面について考えるとき、これから七つの海に乗り出し発展してゆく大英帝国を支えた科学技術の実験工房の雰囲気がある気にはしてならない。ワットの蒸気機関にせよ、一口に職人の「知」を取り込む新しい「知」の創造といっても、馬鹿馬鹿しい思いつきと失敗の試行錯誤に満ちている。奇想天外な思いつきが意外に大きな結果を生むことがある。そして、そうした実験を重ねるうち世界の工場となった大英帝国は大きな結果を手にした。

例えば二十一世紀以後、東大阪や東京の大田区を代表とする精密工場の中小企業工場群の「おっさんたち」がロケットを飛ばし人工衛星を打ち上げることを夢見て試行錯誤を繰り返すことに近い雰囲気にも通じる。

「想像力（イマジネーション）については一つ穴のむじな、広大な地獄に収容しきれないほどの数の悪魔を見る」狂人と恋人と詩人は、大英帝国の発展に直接は寄与しない。また石垣だの月だのライオンだのを職人たちが演じ、ご婦人方を気遣ってやたらに優しいライオンを登場させたりもする、市井の人々、つまり職人たちが演じる素人演劇そのものにもそうした意味はない。けれど、やがて大英帝国へと発展する英国の、その出発点におけるベーコンを中心とした自然哲学グループの高揚した雰囲気が、そのまま演劇に取り込まれていると考えられないであろうか。つまり一見どんなに鄙びて見えても、やがて大事業につながる「実験室の知性」なのである。取り込まれた英国の「知」のその後を辿れば、官能、理性、イマジネーションについての思索とは、思索だけによって燃焼が分子の活性化であることを突き止めたときされるベーコンの思索であり、やがてニュートン、ファラデーを生む大英帝国の「知」へと発展する。そして、常に市井の職人の知恵を取り込む科学技術発展の迫力が展開することになる。



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

魔法、妖精、恋の気まぐれと不思議を描き、しゃれてはいても、それはそれだけに留まったかもしれない作品世界に、これから発展する大英帝国の「知」の秘密をシェイクスピアは忍び込ませた。それがベーコンなどのインテリの議論に対する「身構え」を巧みに作品にちりばめることの意味ではなかろうか。

同時に、もし「ハリー・ポッター」の魔法に科学技術の意味があるとすれば、シェイクスピアが一度清教徒革命で廃れ、王政復古期に復活したとき、いわゆるエリート教育機関としてパブリックスクールが創始され、理系教育が重視されたことにも留意すべきだと思う。文学にも理系の学問は必要としたドライデンが先頭に立ってシェイクスピアを復活した。

この「知」の発展は階級間の確執を生む。後にファラデーが苦勞したように、英国は現在もなお中流階級と労働者階級の二階級に分かれ、労働者階級出身のファラデーは、出身階級ゆえに差別を受けた。「知」にも階級があるのかもしれない。ギリシャ・ローマの古典学、聖書学についていえば、中流階級出身者に労働者階級はかなわない面がある。それらは中流階級の「知」という面が濃厚である。けれど科学技術発展に階級差はない。科学と技術を峻別し、科学を中流階級のもの、技術を労働者階級のものとする傾向は今もなお欧米には存在する。けれど、それが消えるのも時間の問題であろう。

つまり英国においては国の発展と平行して「知」の中で階級差の消滅という革命が起こっていた。一方アメリカではアメリカ独立戦争によって一気に現実世界で階級差の消滅を図った。この事情を考慮すると、アメリカから英国への憧憬をこの点について考えることの複雑さが予想される。

ここで「庭」について考えることに戻る。

これもまたシェイクスピアが大衆を意識した文学作家として、ベーコンなどのインテリの議論に対する「身構え」を巧みに作品にちりばめることをした例になる。

庭師は労働者階級に属する。庭師の造園技術が『リチャード二世』では国家を指導する技術に喩えられることをすでに述べた。国家を指導するベーコンを中心にした「知」に職人の知恵が取り込まれた科学技術発展の背景を考えないではいられない。

このこととアメリカの英国への憧憬との関係を考えてみる。

そのためにNHKテレビ放送などで話題になったターシャ・チューダーの庭づくりについて考えておきたい。

ターシャ・チューダーはガーデニング、児童文学と深い関りがある挿絵画家である。となると、どうしても「庭のイングランド」の伝統につらなる英国を考える。『ピーター・ラビット』の作者であるベアトリックス・ポッターと人違いしそうである。しかし、ターシャと英国の直接的な関りがあるというより、むしろボストンを中心にしたアメリカの東部の文化が、いかに英国の伝統に近い様相があるかを示している。

けれど、よく考えればターシャの庭は「庭のイングランド」の伝統とはやや違う。アメリカの広大な自然の中にある「大草原の小さな家」的な伝統にも近い。またターシャの「座右の銘」が目されるし、ターシャは「座右の銘」的な思考でないとはいえない。

ベアトリックス・ポッターは『ピーター・ラビット』の印税で羊を飼い、羊をブランド品として企業化し成功し、それでナショナル・トラスト運動という英国の自然と名所旧跡を保存する運動を始めた。「庭のイングランド」を保存しようとした。

それは先述のシェイクスピア劇について「ショービジネス」と「正統性」の関りに酷似する。ベアトリックス・ポッターはナショナル・トラスト運動という、いわば「世界遺産ならぬ英国遺産」という「正統性」の保全を、『ピーター・ラビット』の印税で始めた。同じくシェイクスピア劇をめぐる王政復古期以降の「ショービジネス」がなければ「正統性」は確立されなかった。英国ではビジネスと精神価値が深く結びつく。そして「シェイクスピア・カルト」現象が起こったとき、国家予算が投入されてシェイクスピアをめぐる文化の保全がはかられた。政府の政策決定にも関ることになる。

一方ターシャ・チューダーとビジネス・金儲けが直接関るとは思えない。ボストン、ニューヨークといったアメリカ東部の文化的に最先端をゆく人々の思想の一面が、どこか英国の「庭のイングランド」的伝統に似ているだけだ。

ターシャ・チューダーとアメリカ政府の政策決定が直接関るとも思えない。ビジネス・金儲け・成功・世界の警察官・・・といった事柄とは対極にある挿絵付児童文学、庭づくりに親しむ中で、「座右の銘」的な思考が似ているだけだ。「静かな行動」「行動に疲れた心の癒しとしての『行動』」の人なのではないか。

しかし、ここでもう一度『リチャード二世』における国家を庭に喩える比喻について考えてみよう。ビル・ゲイツがコンピュータ世界での覇者となって最後にはチャリティーにいそしみ、英国から爵位を送られる。その動静は、権力の消長が描かれることと、庭師が語る国家論の結論めいた印象が挿入される『リチャード二世』に、どこか似た面がある。

チャリティーとガーデニングは違う。しかしそれに心惹かれ、親しむ人物の国家観が似ている。アングロ・サクソン社会で奮闘した人物が行き着く悟りの境地なのかもしれない。

ベーコンにも「庭について」というエッセイがある。具体的な造園についての関心が延々と書かれ、王侯貴族より庭師を尊重する姿勢が最後に数行付け加えられている。国家と関って奮闘し、庭師を尊重する姿勢については、すでに述べたベーコン流の「知」の革命との結びつきは明らかだと思う。ここに大英帝国発展と「庭」の関係が凝縮されているともいえないことはない。『リチャード二世』における国家を庭に喩えるシェイクスピアの比喻は、ここからヒントを得た可能性はあると思われる。この感覚はベアトリックス・ポッターのナショナル・トラスト運動の原点にもなる。

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベアコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

つまりチャリティーとガーデニングは異なるようであり類似している点は、アングロ・サクソン社会で奮闘した人物が行き着く悟りの境地という個人的なものだけでなく、昨今のNPOの精神において類似しているとも言える。競争して富を集中させ、その後に富の社会還元、再配分を行うための「無欲」を志す感覚なのだ。(もちろんベアトリックス・ポッターのナショナル・トラスト運動は英国の遺産を人々に解放する「富の社会還元」的な要素があるにせよ、そもそも「庭付きの邸宅」を造った貴族に、そうした意思はなかったかもしれない。けれどイングランドを庭にみなす「庭のイングランド」という考え方にはナショナル・トラスト運動の萌芽がないとはいえない。) ただし英米の違いは歴史感覚の有無、階級性の有無、地理的歴史的な文脈を無視した選択感覚の有無である。

ところで以下に掲げるのは、アメリカの広大な自然の中にある「大草原の小さな家」的な伝統にターシャ・チューダーの世界が連なることを連想させる論文である。

幼い頃聞いた物語を作品に生かし、シェイクスピアは民俗学的視点をとるとする論文<sup>26)</sup>である。ほら話(tall tale)と『ヘンリー四世』、ポローニアスの教訓と『ハムレット』、オセロがデズデモーナと結婚するきっかけになった物語と『オセロ』を中心に、他の作品についても、たとえば『十二夜』と民話の分析からルネッサンスのエピファニー感覚がわかるといったり、アメリカのほら話(tall tale)分析を援用したりして、単なる民話との比較を超えた文学性の分析もしようとする論考である。

ここで「アメリカの大草原」と「庭のイングランド」の違いを確認しておきたい。両者とも自然を表すにしても厳しさと広大さが違う。自然から出発し、競争社会で富の集中を目指し、再び「無欲」を目指して富の再配分を行う悟りの境地に達するにしても、英国の「無欲」志向と比べ、アメリカの「無欲」志向はピューリタンの宗教味を帯びる。『リア王』の四幕一場の「富の再配分が過剰を解消」(So distribution should undo excess) はキリスト教的なチャリティーの精神を表すとされる。英本国では、そうした句を含むシェイクスピア作品がピューリタン革命で一度禁止され、王政復古期に復活した。

ここで強調する必要があると思われるのは、西欧がいわゆる聖俗革命を経ているのに対して、アメリカは経ていないということである。英国はピューリタン革命を乗り越えて王政復古を果たした。フランスもフランス革命で僧侶を権力の座から放逐した。一度極端な形で国が宗教に支配されることを否定する革命を行った歴史がある。

これに対し、アメリカはピルグリム・ファーザーズの建国神話を抱いたまま、一度も宗教の支配を否定したことがない。

---

26) Kelly, Charles Greg, *A Folkloric Analysis of Narrative Context in Shakespeare*, (1996). MF||194||14

「アメリカの大草原」は、そこに渡ってきた人々を厳しく鍛え、シェイクスピアと同時代にあった宗教性をむしろ深めたかもしれない。シェイクスピアの中に書かれたピューリタン嫌悪が、アメリカの出発点であったかどうかは定かではない。「庭のイングランド」は王政復古期にやや脱宗教化して、魔法、科学、パブリックスクールという「ハリー・ポッター」を生む要素を育むことになる。

それはアメリカを魅惑し、憧憬させる要素になって行く。

このように英国に極めて様相が似ているのに上記のような違いがある感覚が、以下の米国学位論文にあるように思われる。

騎士で恋人という人物設定のシェイクスピア喜劇に注目し、男性同士の絆や相克の解決として女性が使われることを分析する論文<sup>27)</sup>がある。女性のヒロイズムも家父長主義への従属的側面があることを指摘する。ホモセクシュアルな問題をヘテロセクシュアルな愛を利用して解決する観点を見落とすために、キリスト教を前提としたフライ、グリーンブラット、ユングの論理的矛盾が生じると指摘する。

これは述べてきたシェイクスピアの大衆文学的側面についての議論でも解釈可能なことだと考えられる。「ホモセクシュアルな問題をヘテロセクシュアルな愛を利用して解決する観点」とは、先述のハードボイルドの象徴のように言われる「男はタフでなければ生きられない、優しくなければ生きる資格がない」「権力闘争に打ち勝たなければ生き延びられない、恋愛をする優しさがなければ生きる資格がない」と同じことを言っているのではなからうか。

「権力闘争の厳しさ」を「ホモセクシュアルな問題」と同一視することは色々な問題を含み議論のあるところだとは思われる。けれど軍隊がホモを発生させる土壌であることは疑いががない。ハードボイルドの小説さながらの世界を生きるヤクザがSM嬢の元を訪れ、殴る蹴るの暴力を依頼し、「日頃やられていることを若い女性にやってもらうことで慰めになる」という話もある。これが日常化したのは、ロンドンの売春婦によるスパンキングだと考えられる。ロンドンの電話ボックスに貼られたプロスティテューション・カードの三分之一が「お尻の鞭打ち」に関するものだ。学校教育で法律では禁止されながら裏で横行し、軍隊では堂々で行われる「男・男」のハードな世界が「男・女」の世界に移行することでハードな世界の慰めを見出すことがロンドンの悪所では一般的なのだ。

軍隊にせよ、パブリックスクールにせよ、英国では「男の子を鍛える」ことが特に意識してなされ、鍛えられる側の男の子にとって、優しくしてくれる女の子が慰めになる。

大雑把にスパンキングを、「男性同士の絆や相克」が展開する「男の厳しい世界」へ入る準

---

27) Woodson, Michael, *The Bond of Male Discontent in Shakespeare's Soldier-lover Comedies*, (1996). MF||194||13

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

備として「男の子を鍛える」こと、もしくは「男の厳しい世界」そのものの象徴と捉え、「ホモセクシュアルな問題」とみなせば、映画「小さな恋のメロディー」は「ホモセクシュアルな問題をヘテロセクシュアルな愛を利用して解決する観点」を典型的に提示する。ラテン語の予習をさぼり、先生の部屋に呼ばれてしたたかお尻を叩かれ、涙ぐんで外に出てきた主人公の少年の手を、そっと女生徒が握るところから、この映画の主題である「小さな恋」が本格的に始まる。

もちろんこの映画に「男・男」のハードな世界が「男・女」の世界に移行することでハードな世界の慰めを見出すことがロンドンの悪所では一般的とした大人同士の本格的な鞭打ちの考え方を適用するのはバランスを欠いている。また同じ鞭打ちでも「オンナ・コドモ」の世界で行われる教育としての鞭打ちで、少年俳優の魅力を引き出す程度のもとの、大人を対象とした、特に成人男子が関る本格的な鞭打ちは区別すべきだと思う。『ウィンザーの陽気な女房たち』に出てくるウィル少年（名前ゆえにシェイクスピア自身の投影が論じられる）がラテン語を覚えさせられるときの鞭打ち、道化にリア王が「娘を母親にしてお尻に鞭を受けるようなもの」と揶揄されることなどは前者であり、『リア王』で売春婦を官吏が鞭打つのは官吏自身が性的な喜びを期待してのことだという批判、『アントニーとクレオパトラ』で落ち目になったアントニーが使者を鞭打って鞭の効き目を確かめるような言動をすることなどは、後者である。

映画「小さな恋のメロディー」は映画全体が少年の魅力を引き出すようなものであって、明らかに前者である。けれどフェミニズムは「オンナ・コドモ」の世界を敢えて成人男子の世界から切り離さない。また現実「男の子が鍛えられる」過程で前者と後者を区別するのは難しい面もある。

ところで、この論文がいう「騎士で恋人という人物設定のシェイクスピア喜劇に注目し、男性同士の絆や相克の解決として女性が使われることを分析する」のうち「騎士で恋人という人物設定」を、いささか誤訳気味の、しかし本質は外していないと思われるコピー「男はタフでなければ生きられない、優しくなければ生きる資格がない」で紹介されたチャンドラーの主人公フィリップ・マーロウと重ね合わせたら奇矯に過ぎるだろうか。

つまり「騎士で恋人という人物設定」はシェイクスピア以後も大衆文学もしくは大衆を意識した文学で繰り返し現れる主題なのだ。英国からアメリカへ引き継がれたものとも考えられる。

この論文の作者はホモセクシュアルな問題をヘテロセクシュアルな愛を利用して解決する観点を見落とすために、キリスト教を前提としたフライ、グリーンブラット、ユングの論理的矛盾が生じるという。

問題はキリスト教だけではない。アリストテレスの「詩学」を含め西欧のヘブライ・ヘレニズムの伝統を踏まえ、そこに現代的なテーゼ、アンチテーゼを提供するのが本格的なシェイクスピア批評のありかたであった。そこでは「愛」は精神、肉体を含めた人格同士の高めあいが

主眼であり、すべてをホモかヘテロか、露骨に言えばペニス、ヴァギナ、肛門に還元してしまうような観点はない。(この観点では「オンナ・コドモ」を成人男子から切り離して論じることが不可能になる。何歳であろうと性的関係を考えて瞬間から男女ともに対等な存在として認識される。)

しかし確かにシェイクスピアは「騎士で恋人という人物設定」の下、まずハードな世界が恋愛で解決される作品を書いて大衆を魅惑した。そこに「女性を慰安婦扱いするな」というフェミニズムからの抗議が昨今聞こえるようになった。その抗議が精妙で周到になったのが上記の論文ではなかろうか。

これは英国の実態に正確に迫りながら、英国の外にあるアメリカならではの分析の鋭さがある論文といえる。以上の論点を「権力闘争に打ち勝たなければ生き延びられない、恋愛をする優しさがなければ生きる資格がない」という言葉で表されるテーマを内包する大衆文学的側面のある作品に、ギリシャ・ローマの古典と聖書学への反発、職人の「知」を取り込む新しい「知」の創造というベーコン哲学の側面をシェイクスピアが取り込んだとする観点で解析すればどうなるであろうか。つまり、この論文を、この論文の言葉をもじって批判すれば、「愛」をホモかヘテロかに還元する大衆文学的な捉え方を前提にしているために、シェイクスピア作品の背景にあるベーコン哲学を見落としているということになる。

現実社会で階級が残存する英国ではインテリと大衆の区別がある。一方、現実社会での階級性を否定したアメリカでは「インテリが享受する文学」と「大衆文学」の区別が厳しいのではなかろうか。つまり「恋愛をする優しさがなければ生きる資格がない」という言葉が成立するには、まず「権力闘争に打ち勝たなければ生き延びられない」のは主として男性であり、その荒ぶる魂を慰める存在としてヘテロな愛を捧げ、男性に半ば従属する女性の存在が必要になる。そうした「大衆文学」を批判するのがインテリだということになる。インテリは「知」の世界でひたすら競争し、ギリシャ・ローマの古典と聖書学への反発、職人の「知」を取り込む新しい「知」の創造というベーコン哲学の側面に共感する。アメリカは「知」においても絶えざる革新、革命を国是とする。また女性を半ば慰安婦扱いするヘテロな愛の「大衆的感覚」に厳しい一方で、ホモ的な愛に寛容なのがアメリカのインテリでもある。ホモセクシュアルな問題をヘテロセクシュアルな愛を利用して解決する観点を見落とすために、キリスト教を前提としたフライ、グリーンブラット、ユングの論理的矛盾が生じると指摘するのは、ホモとヘテロの愛の差に敏感な論者が、ヘテロな愛を専らとする「恋愛をする優しさがなければ生きる資格がない」考え方を許容する「大衆文学的側面」がシェイクスピアにはあると指摘したことではなかろうか。

この問題は「男の子の鍛錬」「恋愛」「魔法」という「ハリー・ポッター」の主題でもある。以下、そうした要素と関係がありそうな論文を拾ってみる。

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

オースティンが恋愛・結婚に限定した世界をつくりあげたような、虚構論で、オーピッドの『メタモルフォシーズ』の影響なども考察し、悲劇の後にくる虚構世界の中の人物像としてのプロスペローを探求した論文<sup>28)</sup>がある。

騎士の必須科目とされる宮廷恋愛の伝統も、厳しい世界を生き抜き、女性への優しさをみせる意味で、同種のものを見出して、フィリップ・マーロウを生むアメリカが魅惑される英国の要素かもしれない。宮廷恋愛、家父長支配の伝統の中でシェイクスピアは『恋の骨折り損』で、初めて男女を平等に取り扱ったルネッサンスの作家であるとする論考<sup>29)</sup>がある。フェミニズム的視点ながら、それを前提として、その伝統がすでにシェイクスピア時代の英国にあったことを指摘することにもなっている。

ベドラムのサイズ、病院から救貧施設への変遷、救貧法との関係、プロテスタントのチャリティーの考え方など、実態と狂気を誇張するジョンソンなどとの違いを論じ、シェイクスピアの『リア王』を論じるもの<sup>30)</sup>もある。狂人もまた恋人と詩人の仲間としてイギリスの魅惑の一つにシェイクスピアがしてしまったといえないこともない。

スペンサーの『妖精譚』、シェイクスピアのロマンスものを、古典の哲学を援用した「驚き、不思議の啓示」といった観点で解析する論文<sup>31)</sup>がある。詩論を演劇論に展開する。

これらはアメリカから眺めた英国の実態ともいうべきもので、文献精査による論考である。以上の考察を踏まえ、テロ対策に関する政策提言をするとすれば、英国のアメリカに対する影響力強化とはいいいながら、脱宗教を果たした国から今なお宗教味を捨てきれない国への影響力強化の難しさを思うことになる。

ダーウィンの進化論を否定する宗教味がある国だからこそ科学技術立国で国が活性化するともいえる。ビル・ゲイツがコンピュータの帝王になって後チャリティーに勤しむとも、チャリティーに勤しむ人物を生む宗教味があることと表裏一体をなして科学技術が活性化した国だからこそコンピュータの帝王を生んだともいえる。

そうした国に英国が影響力を持つとすれば「本を読むこと」と深い関わりがある精神性という英米共通の価値観をインテリが共有することに着目すべきかもしれない。英米の違いは、大衆がインテリにある程度従う英国に対し、ほとんど従わないアメリカということではなからうか。「本を読むこと」がアメリカでは軽蔑される風潮さえあるのだ。

---

28) Harrelson, Leslie Jane, *Prospero; A Post-Tragic Figure*, (1996). MF||194||16

29) Tanner, Virginia Elizabeth Dally, *Comitatus: Shakespeare's Joust with Convention in Love's Labor's Lost*, (1997). MF||194||2

30) Jackson, Kenneth S., *Bedlam, Charity, and Renaissance Drama: Reconfiguring the Relationship between Institutions in History*, (1997). MF||194||1

31) Behuin, Robert T., *The Renaissance: An Age of Classical Wonder*, (1995). MF||189||75

「庭のイングランド」ということで指摘した、優しい自然と向き合い、人間がスクラムを組むことだけで外敵に対抗し、むしろ周囲の海を征服して世界に乗り出したイギリス人の精神性には、常に本を友とする習慣があったといえる。その本には児童文学も含まれる。自然が苛烈でないから、優しく成長を見守る視点が生まれ、成長した先の大人は、自然の地形や権力構造に頼ることなく、大人としての自立が出来る。そのイマジネーションのあり方は、アメリカのようにヨーロッパから脱出するやり方ではなく、イギリス独自の人間臭さの表現であったともいえる。そして、そうした伝統は深く英国の国家に結びつき政策決定にも関わってきた。

一方ヨーロッパから脱出したアメリカにも、東部を中心に英国の伝統に連なる思想があるし、詳しく英国の歴史に切り込み、アメリカの伝統と対峙させ、その立場から正確に分析し、独自の見方を展開する批判精神も養われてきた。しかし、それは合衆国の政策決定にボストンやニューヨーク発の思想的な声として影響を与えるかもしれないけれど、政策決定そのものに深く関与するまではゆかないのではないか。

ビジネスを通じて国家政策にまで関与する「正統性」を後世に築き上げたこと、この点は、文学者としてベーコンを利用したシェイクスピアがベーコンにはない特徴を誇れるものかもしれない。ただし、ベーコンが王立協会など英国の科学の伝統を築き上げ、実質的な内容がある伝統を築いたのに対し、シェイクスピアはシェイクスピア独自のものが何なのか、感覚的なものではなく、論理的な言説で明示できる事柄は未だにはっきりしない、常に虚像の疑いをかけられる「神」であり「詩聖」ないし「国家的詩人」なのだ。その実態はイギリス・ルネサンスのベーコンを始めとした知的サロンのメンバーが切り開いた哲学的思想の巨大な宣伝マンだったのかもしれない。

#### (b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの

シェイクスピアと年代がそう違わないローペ・ド・ヴェガ (Lope de Vega) はスペインの偉大な劇作家で、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』(悲劇的結末)と*Castelvines y Monteses* (ハッピーエンド)を、同じイタリアのソースをもとに執筆された観点から比較考察し、ローペの方が深い死を考察した愛のモラルを描くとするもの<sup>32)</sup>がある。

コソボ紛争時に、イスラム系住人とセルビア系住人の対立の中で、男女それぞれが別の地域に属する者同志の恋愛があって、二人が手に手を取って一方の地域から他方へ移動しようとしたとき射殺されるという、『ロミオとジュリエット』さながらの悲劇がおきた。コソボに代表

---

32) Badendyck, Cynthia Rodriguez, *The lovers of Verona in Lope de Vega and Shakespeare : problems in comparison*, (1990). 901.9||R61||Lo



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

される「ヨーロッパの火薬庫」状態はイスラムと西欧の対立から生じる。西のスペインにもイスラムに占領されレコン・キスタが起った過去がある。

スペインの、カルドロン (Calderon) など喜劇に注目し、女性問題も焦点にしてシェイクスピアと比較考察するもの<sup>33)</sup>がある。女性問題よりスペインに力点があるとみれば、米国が西ヨーロッパの文化の伝統にこだわる例になると考えられる。

ここで「英国以外」ということを突き詰めて考えてみよう。英国と「英国以外」の西欧とを区切るものは何であろうか。それは西欧秩序のシステムとしての厳密さだと思う。英国は「英国以外」の西欧ほど厳密なシステムに忠実でないので、それを「人間臭さ」と表現するのだともいえる。

コソボ紛争時には瓦礫の中で美人コンテストを行い「ヨーロッパ精神」を忘れないようにする動きがあった。それは小柄で慎ましく洗練されたヨーロッパ大陸の若い女性の美を競うもので、アングロ・サクソン系の奔放なところのある大柄な美女とは違う。

東洋との接点で「ヨーロッパ精神」が高揚したのは、サラセン帝国の支配を受けたスペインについてもいえる。この項の冒頭に掲げたイタリアの種本の取り扱いをスペインの作家とシェイクスピアとで比較したものは、ローマ法王のお膝元の地の文学をサラセン帝国と対峙する前線の地の文学に発展させたものを論じたことになる。「死と愛」をめぐる文学的展開は、音楽的秩序と通うものがある。どちらも「ヨーロッパ精神」の高揚と深く関係している。それと英国の人間臭さは対峙するものだと思う。

その西欧的厳密な秩序が象徴的に現れているのは音楽かもしれない。そこに関心を示す米国博士論文がある。

シェイクスピア、スコットなどの作品と、著名なドイツ系作曲家の歌と、歌詞を英語、ドイツ語で対照的に考察し、音楽をめぐるイギリスとドイツの交流を考察するもの<sup>34)</sup>がある。付随した独特のロマンティズム（戦う男性の慰安、休息？）が特徴的である。これらは精神において、米国は依然として西欧だと感じさせる。

こうしたドイツ音楽論は、アングロ・サクソンとゲルマンという民族的な近さを強調すれば英国と西欧の近親性の主張になるのかもしれない。先述のドイツ、イギリス共通のホモ・エロ

---

33) Roman, David, *Constructing comedy: Shakespeare and Calderon*, (1990). 902.2||R66||Co

34) Bolthouse, Colleen R, *Was Ist Silvia? Engländerin Oder Deutsche? Restoring The Original English Texts to Songs Schubert set in Translation, a Lecture Recital, together with Three Recitals of Selected Works of H.Purcell, G.F.Handel, W.A.Mozart, F.Schubert, J. Brahms, H.Wolf, F.Poulenc and Others*, (1995). MF||189||31

ティシズム（ドイツ、イギリスに共通のホモ・エロティシズムが国家を動かすという論考<sup>35)</sup>ではイギリスではパブリックスクール的個人主義、文藝に向かう感覚がファシズムに向かうことを阻止したという）とも関係する。

音楽の持つ厳密なシステム感覚は英国と西欧を分かち。そもそも、音楽の都ウィーンは、辺境伯がかつて司った地である。東洋との境界にある東の砦で西欧の守りを固める地ともいえるべきもので、その地の軍楽から音楽は発展したともいわれる。西欧とは異なる民族との対峙で「ヨーロッパ精神」が高揚したことの産物ともいえる。

北の島国英国は、そこまでは高揚しなかったとも、「ヨーロッパ精神」が関ることについては常に間接的に対応していたともいえる。同時に、音楽、ダンス、絵画などは、独自のものを持つまでは概して不得意な領域で、これらを楽しむには、大陸のヨーロッパ人を招かざるを得なかった。これを象徴するのはギャリックがフランス人ダンサーなどを雇い愛国的な暴徒に襲われたことである。大陸と対立する時局でも音楽、ダンスは大陸に頼らざるを得ない。また、遠く十字軍に遡っても、リチャード獅子心王でさえ、どこか当事者というより傭兵の感覚を伴う。

この「ヨーロッパ精神」と音楽、ダンスの関係について、楽譜と書物の違いを考察することで、さらに認識を深めたい。

楽譜と書物の違いは、楽譜が演奏されることを主眼とするのに対し書物は黙読が主眼といった考え方がまず浮かぶ。けれど、楽譜も黙読されるし、書物も朗読される。これが一般的でないことと断定することは早計に過ぎる。

まず書物の黙読が最も盛んなのは日本であり、殆ど朗読がなされないのは日本の特徴といってもいい。それは歴史的に識字率が高く、漢字かな混じり文、ルビといったことも影響してか、字を知らない人に知る人が朗読して聞かせるということが、あまりなかったという、むしろ特殊事情である。西欧はもっと朗読が盛んだ。イギリスのように演劇が盛んな国では、書物は朗読と黙読と双方に供されるという認識が一般的だと考えられる。日本でも小学一年生の多くにとって書物は朗読する以外の何物でもない場合が多い。書物の黙読は訓練の成果ということに留意すべきだ。

楽譜の黙読は特殊な行為との認識が、かつては一般的であった。音楽に傾倒し、楽譜を読む訓練を受けた人が、通常の演奏では得られない特別な境地に達するための特殊行為だという認識があった。これは、批評家などが、そうした境地をエッセイにするので印象的だったともいえる。

---

35) ジョージ・L.モッセ、佐藤卓己・佐藤八寿子訳、『ナショナリズムとセクシュアリティ——市民道徳とナチズム』（バルケマイア叢書、1996）。

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

けれど現在の日本で、楽譜を黙読する、それももっと実用的な意味で黙読することは決して少なくない。明治以来、西欧音楽を国家的なプロジェクトとして国民に教え込むという政策が爛熟期を迎えた日本では、プロやアマチュアの指揮者だけではなく、ちょっとした合唱団の団員でも、楽譜を黙読して新曲をつかむことは、するのではなからうか。

一々拍子を取り、歌うか楽器で演奏しなければ新曲がつかめないというのは、朗読しなければ書物が読めない小学一年生に似ている。似ているだけでなく、行為の質として違いはない。黙読と演奏（朗読）が楽譜と書物を分けるのは、音楽や文字文化についての訓練の差による。特に西欧音楽の楽譜の場合、書物との間に黙読、演奏（朗読）に関する本質的な差はないと考えられる。

この楽譜と書物の違いは、演劇の、台本に基づく演技と台本に基づかない即興との関係について、深い考察をする糸口になると考える。これらを念頭に西欧音楽が象徴する「ヨーロッパ精神」について考えて行こう。

「ヨーロッパ精神」はスペインの戯曲や音楽以外にも、ギリシャ・ローマ神話、「運命の車輪」という考え方にも現れる。

シェイクスピアの悪役が雄弁なことの本质はマキャベリズムを行動に移すことにあるとする論考<sup>36)</sup>がある。シェイクスピア研究では教科書的といっているほどに頻出する「運命の車輪」を使って言えば、悪役は「運命の車輪」を回すトリックスターとして登場し、他の主な登場人物を「車輪」に乗せて回転させているうちに、自分も「車輪」にまきこまれ、一度上昇して栄華を極めると見えて、たちまち「車輪」の下敷きになり、破滅する。これを今さらのように博士論文にするところに米国の特徴がある。ただし今さらのように論文にしてくれたせいで、こうしたヘブライ・ヘレニズム文化と、楽譜、書物との関係を再考できる。

死語であるはずのラテン語に、学術的な発音とはやや異なる発音を付し、バチカンで日常用語として使っている。本来黙読すべき言語に発音を付し、バチカンという特殊な世界でだけ生きた言語化したということになる。また、グレゴリオ聖歌だけでなく、ローマ・カトリック教会はミサ曲など西欧音楽をキリスト教伝播の手段とした。このラテン語と西欧音楽は「ヨーロッパ精神」に深く関わっている。古代・中世から受け継がれる伝統的なメッセージのうち、キリスト教というヘブライズムに、音楽、美術という多分にヘレニズムの要素のあるものを後世に伝える主役が、まずローマ・カトリック教会であったことは疑いが無い。

このことと、シェイクスピア研究が深く関わっている。

その説明のために、以下の論文を紹介したい。

---

36) LaMonda, Leigh Caroline, *Machiavellian villains : evil eloquence in Shakespeare's Richard III, Macbeth, and Othello*, (1995). MF||189||79

父と子の関係を歴史劇でたどる、叙事詩的感覚の論文<sup>37)</sup>がある。米国が父祖の地である西欧を忘れていない証拠を確かめるような感覚である。

『コリオレイナス』の歴代の批評を踏まえた伝統的な考察ながら、作品をシェイクスピア悲劇の典型とした結論と、主人公の動き、心理の読みと古典文学の特殊性を読み込まない点に米国が感じられる論文<sup>38)</sup>がある。つまり、ギリシャ・ローマの古典文学が、こうした論文の作者にとって、古典というより同時代の指針なのだ。

この二つの論文は古代・中世のメッセージを現代に生かすと要約できる。その古代・中世ということは、グーテンベルクの活字印刷の発明があり、その二十年ほど後に楽譜印刷技術が開発される、それ以前から受け継がれてきたメッセージということになる。

歴史劇の叙事詩的感覚と、『コリオレイナス』とが発信する古代・中世のメッセージとは何だろうか。それは「権威」と「民衆のエネルギー」ではないだろうか。この二つはまず作品自体のテーマであり、上記の論文が問題にしたことである。そして戦争遂行に不可欠な要素でもある。

印刷術によって書物、楽譜が流布することにより、ラテン語に替わって各国語の聖書、祈祷書が印刷され、グレゴリオ聖歌に替わる様々な楽曲が発展した。一見ラテン語とグレゴリオ聖歌の「権威」が衰え、バチカンの権威が落ちたように見える。しかし「ヨーロッパ精神」を考えると、必ずしもそうとは言い切れない。

それを論じる前に、ここまで述べてきたことを念頭に、イラク戦争の原因を読んでみよう。当初はアルカイダからの攻撃に反撃し、アフガニスタンのついでにイラクを叩いたと見えたことが、ブッシュ大統領の支持基盤にキリスト教原理主義的（その実態は後で詳述する）なもの存在が明らかになり、中東を火薬庫とするキリスト教とイスラム教の対立の構図が見えてくる。つまりアメリカ軍は現代のハイテク兵器を使って十字軍として中世の戦いをしたことにもなる。

しかし、この分析は本当に正しいだろうか。アメリカで新しく発生したように見えるキリスト教原理主義のキリスト教は、これまで「ヨーロッパ精神」の一要素として分析したローマ・カトリックと、それに抗議したプロテスタント各派のキリスト教と、本当につながっていて「アメリカ軍は現代のハイテク兵器を使って十字軍として中世の戦いをした」と言えるだろうか。もう少し単純な見方も考えられる。誇るべき貿易センタービルを破壊され、多くの人命を奪われたアメリカが、怒りの矛先をイスラムに向けただけ、単純に「やられたから、やり返せ」という現象が起ったという見方である。しかし、アメリカ軍がイラクに攻め込むには、アメリカ

---

37) Buck, William Stuart, *Shakespeare's epic of fathers and sons*, (1990). 930.28||Sh||Buc

38) Jamal, M. A. Y., *Shakespeare's "Coriolanus" in context*, (1995). MF||189||59

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベアコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

国民という「民衆のエネルギー」を、何らかの「権威」で導かない限り不可能である。その方策を分析し「ヨーロッパ精神」との関係を論じてみたい。

ブッシュ政権は戦争を導く権威を「民主主義」に求めた。

民主主義には成熟の期間が必要であり、一国が民主化するには歴史的な成熟期間が必要ということを見逃して、アフガニスタンとイラクを武力で叩けば事が解決するという、異様なほど歴史感覚が欠如したアメリカの様子が米国学位論文から伺われる。これはアメリカが人種の坩堝であって、様々な国の形態が歴史の問題ではなく選択の問題に見えることと関係するのではないかと推定される。例えば昭和天皇が訪米したとき、初めて民衆とにこやかに接する「解放された」天皇の様子と並列して、天皇を歓迎する日系人パーティーでの戦前さながらの厳粛な空気が伝えられた。米国内で日系人として戦時中の迫害に耐え戦前の感覚を維持しているグループがある。一方、戦後の日本人ともアメリカ人は接している。アメリカ人から見れば、戦前の日本人と戦後の日本人、荒っぽく分ければ「忠君愛国」の座右の銘で生きる日本人（より正確には大正デモクラシーを経験しながらも異国にあってナショナリズムが高揚し、民主主義と決して相容れないわけではない皇室の尊厳を尊重するグループ）と「主権在民」の座右の銘で生きる日本人の二種類の日本人ないし日系人はリアルタイムで同時に存在するのだ。アメリカでは自己主張なしにはどんなグループも存在できない。二つのグループの自己主張は同時に存在し、必要があればどちらかを攻撃する必要がある存在になる。攻撃するか援助するか二者択一の世界なのだ。（このことを裏付ける事例になるかもしれない。2007年8月24日付け朝日新聞によれば、ブッシュ大統領は22日カンザスシティで退役軍人を前に戦前の日本とアルカイダを同一視する演説を行ったという。これに対し演説の粗雑な歴史観を非難する論調がマスコミに現れているという。けれど、問題はブッシュ大統領個人の粗雑な歴史観にあるのではなく、そうした政権の指揮の下、若者の命をかけて戦争を遂行し、二度とは帰ってこないかもしれない肉親を戦場に送り出すことを是認するアメリカ国民の歴史感覚の欠如だと思う。それはシェイクスピア研究で学位を取るほどの「インテリ」にさえ行き渡っている感覚なのだ。）

では、ブッシュ政権が指導し、アメリカ国民が是認した「粗雑な歴史観」ではなくイラク戦争の「精神」を分析するとすればどうなるだろうか。やや一般の共感を得ているのは「一神教のせいだ」という「宗教哲学的歴史観」に基づく分析である。上記の「アメリカ軍は現代のハイテク兵器を使って十字軍として中世の戦いをした」という分析にも通じる。

けれど、この分析には疑問がある。アメリカは同じアラブ圏のイスラム教国であるサウジアラビアとは戦争をする気配がない。またアメリカで勢力を伸ばしているキリスト教原理主義には、かなり政治的な色彩が強く、ブッシュ再選時には共和党との結びつきが報じられたものの、次期大統領選を控え、民主党と結ぶ「キリスト教原理主義」を民主党側から「創始」しそうな気配も見える。

一神教同士の戦いという観点をとるなら、イスラム教に対し、私はキリスト教原理主義そのものではなく「ハイテク兵器に宿る精神」といったものを考えたい。そこに「ヨーロッパ精神」から受け継がれた一神教の哲学が宿り、科学技術立国としてのアメリカを権威付けている。「キリスト教原理主義」はそこから派生した存在だと思う。それは、かなり政治的かつ新興宗教的で、それが盛んだという事実は、むしろ現在のアメリカがおかれた国情の結果に過ぎず、一神教の哲学をいうなら、科学技術そのものに宿る一神教的な性質の方が重要ではなからうか。

この一神教の哲学と科学技術の関係を考える上でベーコンほど重要な存在はないと考える。それは科学史的にそうだというだけでなく、科学史の「史」を無視した分析にも耐えうるといふ点で重要だと考える。

ここまでではアメリカの「粗雑な歴史観」ないし「歴史を無視する態度」を批判してきた。けれど科学技術そのものに「歴史を無視する態度」がいくらか含まれていることを忘れてはならない。先述した科学史家の言を繰り返せば、「人間の知識と力とは合一する」（「知は力なり」というF. ベーコンの言葉もまた、当時ロンドンで進行していた学者と職人との結合の運動を哲学的にいい表わしたものであった<sup>39)</sup>ということになるなら、職人という船を操縦し、道具を作り出す技術は身に付けていても、聖書学、ギリシャ・ローマの古典学には疎い存在の持つ知恵が「知」の体系に組み込まれたことを意味する。実際に、ここで大きくいえば「ヨーロッパの精神」の中に「歴史を無視する態度」が入れ込まれたことになる。このこととアメリカの「シェイクスピア=ベーコン説」に好意的な論調が関係する。

ギリシャ・ローマの古典や「運命の車輪」といった考え方は、ベーコンにとってもシェイクスピアにとっても親しみ深い存在ではあったであろう。シェイクスピアにとっては、しかし、文字通り古典に過ぎない。他山の石として自分の創作のこやしにすべきものである。

同時代の指針としての価値は、実際にイギリスの国政を担うベーコンにとって、より大きかったであろう。そのベーコンの感覚が、米国博士論文には息づいている。それこそが、ベーコンの夢想した「科学技術理想郷」の一部としてのアメリカを引き継いでいる証ではなからうか。

同時にその「息づき方」の生々しさとリアルタイムの現実感から伺われるアメリカの科学技術立国の精神が国際問題を引き起こす。アメリカ軍のアフガニスタン攻撃は聖書時代に逆戻りしたような印象を与えた。米国には歴史感覚の欠如した面があって、中世、古代へと歴史を飛び越えて感覚が逆戻りし、それがハイテク兵器を持つ軍を動かす国家の政策決定に影響する。それは米国自体に中世以前はおろか独立戦争以前についても現在の国家の意思決定に繋がるようなはっきりした歴史がなく、独立当初から、様々な思想、価値観がすべて選択の問題であったことに起因するのではなからうか。

---

39) 山崎俊男他編纂、『科学技術史概論』, (オーム社,1978), p.64.

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

このことと一神教との関係を考えてみよう。

一神教の神の座に実験・観察の観察者が座ったのが西欧の科学であるという科学史の一説は、あまりに科学イデオロギーと一神教を結びつけ過ぎている。その結果、ローマ・カトリックのように一年三百六十五日に対応する聖人が存在する多神教的な側面を持つ宗教より、聖書に返れと叫び、偶像崇拜を否定するプロテスタントと科学の結びつきを言う説が生じた。しかし、これは、科学史家の間でも批判が多く、見直しがなされつつある。

むしろ先述の、歴史劇の叙事詩的感覚と、『コリオレイナス』とが発信する古代・中世のメッセージとは「権威」と「民衆のエネルギー」ではないだろうかとしたことが、科学技術とヘブライ・ヘレニズム文化の関係を示しているように思われる。これに「運命の車輪」を加えれば、一神教を強調しなくても西欧に科学が生まれた経緯が示せる。

西欧近代科学は占星術から天文学への発展が契機になっている。人々の「運命」への関心は、生まれた時刻を秒単位で測ることさえさせた。それから科学は宇宙観をめぐるバチカンとはりあう。バチカンの権威、ニュートンをウェストミンスター・アビーの主祭壇近くに葬るイギリス政府の権威、そして核を持ち、宇宙開発を進めるアメリカの威信にいたるまで、まず科学は「権威」とは切れない縁があり、「民衆のエネルギー」によって科学が技術と手を結んで科学技術となってもなお「権威」との縁は切れない。

つまり町工場のおっさんたちのように、どんなに慎ましく見え、銀行の貸し渋りに苦しんで一見「権威」とは無縁に見えても、世界的な技術を持ち、宇宙ロケットを飛ばす夢を持てば、それだけで「権威」が向こうからすりよってくる。東大阪や大田区の町工場のおっさんたちの場合、特定の宗教の影響があるわけではなく、ましてや一神教と関りがあるはずもない。科学技術イデオロギーを考える場合、参考になる。

町工場のおっさんたちは俗世間的な夢や、人間関係の愛憎に悩まされる様子はない。すべてを腕一本の技術に賭ける。それが、まず基本的な科学技術イデオロギーではなかろうか。その感覚はベーコンが「知は力なり」と哲学的に表現して呼びかけた学者と職人の結合の運動の対象になった職人たちの感覚であり、『夏の夜の夢』で活躍する職人たちのイデオロギーでもあったと推定される。

けれど科学技術は一方で俗世間的な夢を追いかけ、それを国家規模に拡大し、戦争をするエネルギーによって、軍事技術として何より発展したことも確かだ。つまり科学技術には極端な俗世間的欲望と、超俗の人生観とが結合している。それが科学技術イデオロギーではないか。

ここから、なぜアイザック・ニュートンが貧乏な家庭に生まれ、聖書学と古典学という、全く「文系」の才能によってケンブリッジ大学の給費生となり、大学に入ってから学問でイギリスはおろか世界の科学技術を一変させたかの説明がつく。極端な俗世間的欲望と、超俗の人生観とが結合し、運命について考えることを余儀なくさせられるのが聖書学と古典学なのだ。

そしてニュートン一人にとどまらず、以後大英帝国の発展と衰退の間、さらに現在に至るまで英国のエリートにとって聖書学と古典学は必須科目であり続けている。

もちろん数学や物理の才能なしに科学技術は成立しない。けれど、極端な俗世間的欲望と、超俗の人生観とが結合した精神がなければ、科学技術発展の意欲が湧かない。さらにラテン語という死語を学ぶ頭の働きの、なぜか理工系の才能開花の刺激になる。それは我が国で漢籍を学ぶ頭の働きの、なぜか森鷗外や湯川秀樹など「理工系」の才能を刺激したことを連想させる。これについては、楽譜や書物の印刷と、演奏、朗読の関係を論じることと併せて後述したい。

「西欧の場合」の科学技術イデオロギーはこれで一応「概観レベル」の説明がつく。ニュートンの大先輩であるフランシス・ベーコンによって、極端な俗世間的欲望と、超俗の人生観とが結合した「聖書学と古典学」のイデオロギーが、「民衆のエネルギー」を取り込み、「知は力なり」の「力」を得た。「西欧以外の場合」についての考察は後に回して、「ヨーロッパ精神」を、科学技術を通して受け継いだアメリカを考える。しばらく科学技術立国のアメリカの博士論文から「聖書学と古典学」のイデオロギーを見てみよう。

ハムレットのメランコリーをギリシャ・ローマの古典時代からの理論で再考し、リチャード二世夫人のイザベラにも、メランコリーの自意識、自己批判がハムレットに劣らずあることを言って、伝統的な批評の欠落を埋めようとする考察<sup>40)</sup>がある。古典を同時代の指針として捉えなければ書けない論考だと思われる。

アメリカ軍のアフガニスタン攻撃は聖書時代に逆戻りしたような印象を与えたと先述した。

そうした状況では、米国学位論文でヨーロッパ大陸への憧憬が感じられる論文は、つまり「ヨーロッパの火薬庫」「中東の火薬庫」への憧憬でもあり、「テロ対策」と直接的に繋がるものとしても説明がつかないことはない。つまり、極端な俗世間的欲望と、超俗の人生観とが結合した聖書学、古典学、科学技術の静と動の二面が現れたと考えてもよいのではなかろうか。

異性装問題をホモの問題ではなくギリシャ神話のエロス、アフロディテや、スペンサーの『フェアリー・クイーン』、ミルトンの『失樂園』などと比較考察し、イギリスだけでなく、アイルランドや古典感覚を含めたイギリス以外の西欧感覚として論考したもの<sup>41)</sup>がある。

この論文には異性装問題をすぐ性愛の問題にしてしまうアメリカの特徴が現れている。少年が女性を演じ、その虚構の女性が男装するという、男女の設定を性愛と結びつけずに素直に受け入れられないのかと思う。それは実際に舞台上で少年俳優が女性役を演じた歴史がないせいだ

---

40) Ginsberg, Marsha W, *Reconceiving Melancholy: Gynecological Moles of Difference in Shakespeare's Hamlet and Richard II*, (1996). MF||198||9

41) Stone, James Waller, *Crossing the Mirror. Androgyny and Transvestism in the English Renaissance*,(1996).



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

と、一応解釈できる。さらにホモとヘテロに人間関係を分類する態度は、先述した「すべてをホモかヘテロか、露骨に言えばペニス、ヴァギナ、肛門に還元してしまうような観点」に通じる。恋愛を演じる虚構の世界にひたる伝統を知らず、「性愛の人体実験」のような、科学技術の威信だけを信じたアメリカ独特の大衆感覚がそこにあるともいえる。

しかし、この論文が「ヨーロッパ精神」と断絶しているとはいえない。この論考のように徹底してホモ問題のような人間の体臭が感じられる論考ではなく、音楽のヴァリエーションか何かのように捉えられると、コソポでの瓦礫の中の美人コンテストに似た、強烈な「ヨーロッパ精神」が感じられる。

このことを説明するとすればモーツァルトの手紙の下品さと音楽の関係が指摘できる。モーツァルトの手紙にはコンスタンツェへの愛を語るにも「君のお尻を虐めてやるぞ」といった「すべてをホモかヘテロか、露骨に言えばペニス、ヴァギナ、肛門に還元してしまうような観点」が盛り込まれている。それがモーツァルトの才能によって音楽に昇華されると何世紀にもわたって人々を魅了する優雅な芸術に生まれ変わる。このモーツァルトの音楽がウィーンという「辺境伯がかつて司った地であり、東洋との境界にある東の砦で西欧の守りを固める地ともいうべきもの」で生まれ、「その地の軍楽から音楽は発展したともいわれる」と先述したことの代表であることに疑いはない。西欧とは異なる民族との対峙で「ヨーロッパ精神」が高揚したことの産物なのだ。

このことと、これまで論じてきたこととの関係を示すには一足飛びにアメリカを代表する音楽であるジャズについて述べた方が早い。

バッハ、モーツァルト、ベートーベンに代表される西欧クラシック音楽はシャンソンからジャズにも受け継がれた。これは社会的反響を考慮に入れず、純粋に和声や音階だけを問題にした場合にそうなる。ドイツ中心の西欧音楽にフランスが関ろうとし、ラベルの「ボレロ」のようなオーケストラを駆使する成果を生んだパリ音楽院の和声学が爛熟をみた。こうしたフランス音楽界の潮流なしにはシャンソンは生まれなかったし、シャンソンの和声と音階なしにジャズの誕生はありえない。

けれど「ヨーロッパ精神」がジャズに生きていくといえるだろうか。音楽理論的にはつながっているモーツァルトとジャズが、その体現している「精神」について見ると、いつのまに「ヨーロッパ精神」の代表から「アメリカ精神」の代表に変貌したのだろうか。

その変遷は音楽会に参加する服装に象徴される。西欧クラシック音楽は、現代音楽に近い題目でもネクタイを締めた正装が似合う。ジャズは一転して正装は似合わない。シャンソンはその中間である。

これは音楽のもつ「権威」と関係している。西欧クラシック音楽の根底にはグレゴリオ聖歌の「権威」の残存があり、死語であるラテン語を、厳かな響きで発音し、枢機卿たちが会話を

るパチカンの「権威」が生き残っている。これが「ヨーロッパ精神」にとって不可欠なものである。どんなにモーツァルトを親しみやすく演奏しても、この「権威」の響きなしには、例えば「ドン・ジョバンニ」の地獄の怖さは伝わらない。「レクイエム」の天上に死者をいざなう恍惚は表現できない。

そんなことはない、と現代日本の若い世代なら反論するかもしれない。モーツァルトの「音の恐怖」をジャズで表現してみせるという音楽家や音楽愛好家もいそうなのが明治以来、西欧音楽を国家的なプロジェクトとして国民に教え込むという政策が爛熟期を迎えた日本である。モーツァルトをジャズで演奏するための解説書が素人向けに販売される昨今なのだ。

これに対しては戦後知識人の一部にあったジャズへの憧憬を語るほかはない。アメリカの科学技術に宿るものを含めた「ヨーロッパ精神」に叩き潰された戦後の焼け跡で、戦争の根源を国家に宿る「権威主義」だと突き詰めて考えた人々がいた。「終戦の青空」を見つめる解放感の中で、その人々は遠く進駐軍キャンプから聞こえてくるジャズの音色に、「権威主義からの脱却」を感じ、その「即興性」をこよなく愛した。

この人々に「即興性」ならモーツァルトのピアノ協奏曲のカデンツァだって同じことだといっても通じない。歌舞音楽禁止の時勢で西欧音楽を国家的なプロジェクトとして国民に教え込むという政策の恩恵を受けていない世代なのだ。

では、こうした人々をジャズの音楽そのものではなく「ネクタイが似合わない音楽会に象徴される権威主義からの脱却」と「ジャズだけのものと妄信する即興性」だけに興味を示した人々で、音楽の本質を分かっているかといふと切り捨てられるだろうか。

戦争の惨禍と代償にジャズに救いを感じた人々の直感を、そう馬鹿にはできない。この人々の直感は、書物、楽譜、印刷術をめぐって朗読、演奏、黙読に関り、演劇における台本と即興の関係を考察することで跡付けることができる。

西欧クラシック音楽の「楽譜主義」は徹底している。

それを表す最大の表現は「暗譜」という言葉である。音楽を覚えるのではない。譜面を覚えるのだ。ショパンコンクールでは「楽譜に忠実でない」という理由で多くの応募者が泣いた。音楽コンクールは音楽を審査するのではなく楽譜を音に直す作業を審査するのだ。

これは口承口伝によって音楽を継承し、譜面は単なる覚書に過ぎない日本の伝統音楽の担い手を驚かせ疑問を抱かせるものになる。さらに西洋の演劇を専攻する我々も驚かせる。

シェイクスピア研究のように劇場に行かず書物だけでもやれる世界では、劇場通いの人々と、書物だけでシェイクスピア鑑賞をする人々との間の確執が伝統的にある。書物だけでシェイクスピア鑑賞をする人々が引き合いに出すのは「読むためのドラマ」という概念である。この考え方が音楽先進国のドイツ人に好まれることと、西欧クラシック音楽の徹底した「譜面主義」とは無縁ではないであろう。

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

演劇では「読むためのドラマ」と「劇場で実際に演技するためのドラマ」が対立することもある。けれど西欧クラシック音楽は徹底していわば「読むための音楽」なのだ。音楽会とは楽譜を音に直す作業に過ぎず、演劇でいえば台本の朗読会をやっているようなものなのだ。どちらかといえば「読むためのドラマ」派が影を潜め、劇場を意識しないシェイクスピア研究が成立しなくなっている現状にいる我々を驚かせる。

同時に、このことは日本の戦後の焼け跡でジャズに惹かれた知識人の直感を裏付ける。西欧クラシック音楽とジャズは、音楽理論的につながっていても、根本的に違う部分がある。それは西欧クラシック音楽が「読むための音楽」であるのに対し、ジャズは楽譜からの脱却を常に意識しているということだ。その「即興性」は音楽的に変わらなくても譜面を離れる意識が違う。モーツァルト自身が弾いたピアノ協奏曲のカデンツァが、当初は「即興」であったにも関わらず、採譜されて「権威」を持つ。マイルス・デイヴィスの演奏はCDになって「音楽としての権威」は若干持っても、それを採譜して出版する音楽家は、ジャズの「即興性」を譜面化することが音楽としてのジャズへの背信行為であるかのような罪悪感を、常に払拭できないでいる。

西欧クラシック音楽が持つ徹底した「楽譜主義」は、どこか日本の国家行政や司法における徹底した「文書主義」に酷似している。コンピュータの発達した現在でさえ、「文書」によらない契約は「権威」を持たず、一旦取り交わした「文書」は誤字脱字を含め一言一句変更してはならないことが徹底している。あくまで「文書」を取り交わしたのであって、「文書の内容」を取り交わしたわけではないのだ。

このことと「明治以来の、西欧音楽を国家的なプロジェクトとして国民に教え込むという政策」とは無縁ではない。高齢者の音楽治療に使われ、今もってある年代以上の人々には「日本人の心のふるさと」を音楽で表現したことになる「文部省唱歌」は、「文書主義」が徹底した政府の役人（「お墨付き」という言葉は江戸時代以前からあって「文書主義」は日本の歴史をどこまで遡れるか見当もつかない。）がプロジェクトを組んで合議制で生み出したもので、国家政策の一環なのだ。それは西欧クラシック音楽に酷似した旋律と和声を持ち、中には名曲の誉れ高いものまである。

本稿の目的は科学技術に宿るものを含む「ヨーロッパ精神」のアメリカへの継承を、シェイクスピア研究の一環として行うものであって、我が国の国家イデオロギーを分析するものではない。しかし明治政府の脱亜入欧政策が徹底して本質をついていることが、何ゆえに我が国のシェイクスピア受容が翻訳、研究を含め、英米に継ぐ高水準にあって、他の国のような「シェイクスピア受容によって、その国のアイデンティティーが露呈する」結果にならないかの理由になることを指摘したい。

そのため一見「(1) 移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴(d)

多民族国家、植民地政策などに関わるもの」に分類すべきとも見える論文<sup>42)</sup>をここで紹介したい。というのは、確かに黒人女性がエジプトにおけるシェイクスピア受容を論じ、アラブ世界のアイデンティティーを論じている。けれど、むしろアメリカにとっての「ヨーロッパ精神」とは何かを描き、アメリカから西ヨーロッパへの広い意味での「憧憬」を批判的に考えさせられる論文であり、日本の国家イデオロギーと対比しやすい論文であるので、ここで紹介する。黒人女性とはいってもグロトン・スクールからハーバード大学に進学した黒人女性がハーバード大学で博士号をとった学位論文である。一面ではアメリカの知性を代表している。

この論文が語るアラブ世界におけるシェイクスピア受容は、アラブにとって敵である旧宗主国イギリスの中に見出した唯一のコーヒーショップで話し合えるような親しい友人がシェイクスピアというとらえ方になる。シェイクスピアに対してはエジプトというよりむしろアラブという意識が強いとする。スーダンやレバノンのようにフランスの統治があった地域を含め、シェイクスピアについては反ヨーロッパをアラブの名のもとに意識するという。

具体的なシェイクスピアのエジプトにおける受容の例として、シェイクスピアの教養をもつ人物が刑務所で看守に殴られるシーンなど、イラクでのアメリカ軍の拷問を思わせる「シェイクスピアを主題としたアラビア文学」を紹介する。アメリカに対しても、イギリスに対するのと同じくアイデンティティーを考え、複雑な心境になることを論じる。アメリカのアラブへの資金援助、イラク進攻と、アメリカに似た秩序を打ちたてる動きについても同様とする。アラブのアイデンティティーに対する侮辱を感じると同時に、人道的な支援への感謝の気持ちもあるという。

シェイクスピアのオーサーシップを掘り崩す努力はまだ生煮えで成功していないという言い方をする。オーサーシップがはっきりしないところに切り込んで、「黒人女性としてのシェイクスピア」というタイトルの文献<sup>43)</sup>を紹介しながらシェイクスピア作品の作者が植民地主義の抑圧者なのか被害者なのかははっきりさせたい<sup>44)</sup>とする。これがアメリカでバーコン説が絶えない核になる思想とも考えられる。

すぐれた文学は作者の一貫した思想が流れているはずだという信念があれば、黒人女性にとって、この問題が文学について論ずる中核になる。同時にシェイクスピアはイギリスのものであってアメリカのシェイクスピアというものは存在しないとする。

おそらくこの論文の作者は、まさに「アメリカのシェイクスピア」のただ中にいるので、そ

---

42) Said, Zahr Kassim Sallam, *The Arab takes on Shakespeare: Adaptation, allusion, and the struggle for artistic identity in Egypt*, (2003).

43) Angelou, Maya, *Shakespeare was a black woman*,(1998),p.173.

44) Said, Zahr Kassim Sallam, *The Arab takes on Shakespeare: Adaptation, allusion, and the struggle for artistic identity in Egypt*, (2003), p.8

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

れが見えないのであろう。この論文はアラブ世界が「看守と囚人」「主人と奴隷」といった「支配と被支配」の関係の中でアイデンティティを模索する体質があることを雄弁に語る。それならローレンス・オリビエ主演の映画「オセロ」の演技が、解放されないアメリカの黒人を象徴し、檻の中の猛獣の動きを擬したことを連想しないではいられない。この論文自体、まさに「アメリカのシェイクスピア」の核心をついている。

「支配と被支配」の関係は「英雄と大衆」も含まれる。この論文はナポレオンのアフリカ進攻にもふれ、英国人のいつのまにか支配権を確立するやり方にも触れている。

ここで「ヨーロッパ精神」との関係を含めて議論を整理すれば、国家支配のやり方で「古くからの記録による神秘性に基づく支配」と「英雄による支配」が考えられる。

科学技術による物理的な支配はこの二つを合成したものと考えられる。聖書学、古典学を必須としたエリートによる支配の中で、「古くからの記録」の整理の仕方が合理的になり、精緻なシステムを築き上げ「科学」が誕生する。一方で、職人の知恵という「大衆の中の小さな英雄」の働きが積み重なって「技術」となる。この二つを結びつけ「科学技術」としたのがベーコンの「知は力なり」であった。

薔薇戦争を主題にした歴史劇で「古くからの記録による神秘性に基づく支配」がうまくゆかなくなり、「英雄による支配」を目指し英雄たらんとする者が競い合っても、それがうまくゆかず、権力闘争が凄惨を極める様子をシェイクスピアは描いた。そして上記のベーコンなどインテリグループが努力した職人の知恵と学者の結合努力を、庶民感覚で描きながら、近代的なインテリの苦悩も演劇化した。それは「ヨーロッパ精神」に反逆しつつ「ヨーロッパ精神」の新たなページを切り開くものでもあった。

現在のイラクは、王制がなくなり、フセインという英雄を失った混乱を露呈している。国家統治には「古くからの記録による神秘性に基づく支配」か「英雄による支配」か、少なくともどちらかは必要なのだ。民主主義も、身近にいる「小さな英雄」を選び、育てて、やがて国家規模の「大きな英雄」にすることだともいえる。これと「古くからの記録による神秘性に基づく支配」を併用するのが立憲君主制だと考えられる。

「アラブにとって敵である旧宗主国イギリスの中に見出した唯一のコーヒーショップで話し合えるような親しい友人がシェイクスピアというとらえ方」は英雄に拍手を送りたい庶民の気持ちを表現したという要素が強いのではなかろうか。しかも差別されるマイノリティーの気持ちもよくわかっている作家なのだ。

またアラブに限らず「古くからの記録による神秘性に基づく支配」がうまくゆくには、それが「その国の神秘性」である必要がある。上記の論文では、英国のエリートである英国紳士による支配に苦しむアラブの気持ちが描かれている。大英帝国の神秘性を背景にした支配では、民族の誇りが傷つけられる。

シェイクスピア劇に描かれる「古くからの記録による神秘性に基づく支配」と「英雄による支配」の二要素が、実際の国政にどうかという前に、演劇土壌において我が国にそろっていることは、梅原猛のスーパー歌舞伎「オオクニヌシ」「ヤマトタケル」を見れば明らかである。梅原猛はそもそも万葉集や古事記の裏に隠された事実を発掘し、「古くからの記録による神秘性に基づく支配」「英雄による支配」の二要素が絡む権力闘争が凄惨を極める様を描き出す「資料の裏づけのある文学」の作家であった。「オオクニヌシ」「ヤマトタケル」は、「古くからの記録による神秘性」の中から掘り起こした英雄を、英雄に拍手を送りたい庶民の気持ちに合致させた。

さて、では我が国の国家統治のための国家イデオロギーの実態はといえば、「文部省唱歌」に話を戻す必要がある。今もってある年代以上の人々には「日本人の心のふるさと」になる歌の数々を国家プロジェクトでつくりだし、それはどう考えても西欧クラシック音楽の範疇に入る和声と音階を持つ名曲の数々であって、結果として計画的に民族に「ヨーロッパの精神」を叩き込んだことになる。

日本の場合「脱亜入欧」政策を自らとったため、アラブのように西欧に支配される恨みを、戦争体験者が個人的に抱く場合をのぞいて、国家的には持たなかったのではなからうか。少なくとも、その面にばかり注目が集まってシェイクスピア受容の形がゆがむことはなかった。

梅原猛のスーパー歌舞伎に対応する音楽は黛敏郎の「涅槃交響曲」ではないか。いわば我が国の「グレゴリオ聖歌」である声明をオーケストラにのせ、音響解析で、オーケストラの音で梵鐘の音を再現した。

「古くからの記録による神秘性に基づく支配」という点でいえば、声明とグレゴリオ聖歌は対応し、カトリックの僧侶たちがラテン語での会話をバチカンの中で行い、聖書や祈祷書などの経典もラテン語を尊重し、死語を生かすことは、我が国の読経になぞらえられる。漢文を中国語の発音をするでもなし、書き下し文として読むでもなし、そのまま漢字の音を順序通り発音してゆくのは、日本版「死語の蘇らせ」とも解釈できる。

確かにグレゴリオ聖歌から発展して合理的な楽譜をつくりだし、写本だけでなく印刷術まで発明した西欧と、楽譜は覚書に過ぎず、ほとんどを口伝口承で伝えてきた我が国の伝統的な音楽の歴史は違う。けれど結果として精緻なシステムが出来上がり、個人的な即興を許さない体制が出来上がったこととしては同じではなからうか。西欧でも、例えばバレエなどダンスの記譜法の合理的なものが発明され印刷されて普及した話は聞かない。けれどバレリーナやダンサーは、「まるで目に見えない楽譜を厳密に演奏するように」踊る。

そして「まるで目に見えない楽譜を厳密に演奏するように」踊り、演奏する点では我が国の伝統的な音楽や踊りも変わりはない。

黛敏郎の「涅槃交響曲」に、梅原猛のスーパー歌舞伎に対応する「英雄に拍手を送りたい庶

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

民の気持ち」が織り込まれているかどうかははっきりしない。「英雄に拍手を送りたい庶民の気持ち」は、現実の政治と絡めば、国家主義から判官びいき、無常観に近い平和主義まで、様々な形をとる。けれど、黨の国家主義的な言動はともかく、その音楽が国家主義的であったとは思えない。黨が「愛国行進曲」をこよなく愛したという話は聞かない。黨がピアノを贈って援助した武満徹の音楽の背景にはジャズがあって、ジャズにとって「英雄に拍手を送りたい庶民の気持ち」は不可欠なものだ。同時に国家主義とは相容れない。

西欧クラシック音楽の「ヨーロッパ精神」に対してジャズは「アメリカ精神」を象徴する。ただし、この二つの関係は見かけほど単純ではない。「読む音楽」と無理にでも「即興をよそおう」音楽の違いがある点はすでに述べた。ジャズが無理にでも「英雄に拍手を送りたい庶民の気持ち」にそう必要があることは、二十世紀を代表するマイルス・デイヴィスを考えれば明らかだ。

裕福な家に生まれ、グループに有能な白人のアレンジャーを入れ、ジュリアード音楽院で学んだ。常に新しい音楽を創造する際にも、そうした音楽的知識に基づいて和声、音階に工夫を凝らし、調性を配慮して「即興」を生み出す準備は周到で意識的で計画的であった。

そうした一面は伏せ、ひたすら「即興」の才能を表に出し、常に若い世代の拍手喝采を得て進化する面が強調される。ジャズの場合は、伝記はむしろ貧民窟に生まれ、できれば酒や麻薬に溺れながらであった方が受けはよい。ジャズが無理にでも「英雄に拍手を送りたい庶民の気持ち」にそう必要があるというのは、そういうことなのだ。

音楽的には、たとえばショパンコンクール二位の内田光子がジェフリー・テイトと組んでモーツァルトのピアノ協奏曲を演奏するのと変わらないのに、ジャズの場合だけ、まるで「大道芸で受けを狙う」ポーズを必要とする。それはポーズだけであって、本当に「受ける」には西欧クラシック音楽と内容的にはほとんど変わらない研鑽を必要とする。

「ヨーロッパ精神」が「アメリカ精神」に受け継がれ、科学技術を介して、シェイクスピア劇に描かれる「古くからの記録による神秘性に基づく支配」と「英雄による支配」の二要素を受け渡したと分析すれば、梅原猛、黛敏郎、武満徹の三人の芸術家を挙げるだけで、我が国がシェイクスピア受容において英米なみの「精神」を持っていることがわかる。

この部分に関していえば、植民地化によって「他国の神秘性に基づく支配」を受けたり、近代的なインテリの苦悩に社会主義イデオロギーを持ち込まなければ受容できなかった国々とは違って、我が国はシェイクスピアを「英米の精神」そのままに受け入れることができたのではなかろうか。

#### (c) 西欧文化全体と関わるもの

ルネッサンス固有の思想と『ハムレット』の影響関係で、特にモンテーニュの『エッセイズ』

など懐疑主義をめぐる論考<sup>45)</sup>、T.S.エリオットのアングロ・カトリシズムへの改宗問題を論じるもの<sup>46)</sup>などは、現代的であっても、深いところで西欧へのこだわりをみせている。

モンテーニュはハムレットの死への恐れを述べた独白とともに、何度も論じた。シェイクスピアの普遍性との関係でも論じた。この米国の西欧全般への回帰といったことを取り上げる項目で論じるということは、シェイクスピアの普遍性に懐疑主義の普遍性、キリスト教の普遍性があることにもつながる。

ここで「アフガニスタンのついでにイラクを叩いたと見えたことが、ブッシュ大統領の支持基盤にキリスト教原理主義的なものの存在が明らかになった」と先述したことを説明しよう。ポーンアゲインといわれる大人になってからキリスト教を再確認して救われたためにキリスト教を文字通り信じるようになった人々がアメリカでは多いといわれる。

それは一種の現代人の悩み治療の一環という感覚が強く、本当に歴史を遡り原始キリスト教に立ち返ったわけではない。つまり、日本や西欧のように歴史感覚がある国ではあり得ない現象なのだ。それは「懐疑主義」に陥った現代人感覚からの脱却であり、「反・懐疑主義」とでも名付けた方がよいのかもしれない。それがイラク戦争の一因であり、「テロ対策」に各国が迫られる原因だとしたら、国際社会にとっても重要である。

それにしても「懐疑主義」が良く論じられるのは西欧キリスト教の特徴だと思う。「仏教の懐疑主義」「イスラム教の懐疑主義」といったことは、あまり聞かない。そのくらいローマ・カトリックからプロテスタントに至るキリスト教の西欧支配が長く、厳しく、それに対する「懐疑主義」までが、一つの「宗派」のように、西欧で普遍性を獲得したともいえる。考えてみれば、逡巡するハムレットは、悩める近代人の象徴ながら、キリスト教の「懐疑主義」という「宗派」の代表的人物かもしれないとさえ思う。

同時に科学技術の隆盛がキリスト教からもたらされたものという経緯がある。先述したように、聖書学、古典学を必須としたエリートによる支配の中で、「古くからの記録」の整理の仕方が合理的になり、精緻なシステムを築き上げ「科学」が誕生する。一方で、職人の知恵という「大衆の中の小さな英雄」の働きが積み重なって「技術」となる。この二つを結びつけ「科学技術」となると考えれば、ローマ・カトリックが長く西欧を支配した「神秘性」の延長に、極端に言えば現在の「核による支配」があることになる。

要するに現代の科学技術も「ヘブライ・ヘレニズム文化」の一種である。これに対し「仏教の懐疑主義」「イスラム教の懐疑主義」といったことを、あまり聞かない理由は、「ヘブライ・

---

45) Doloff, S. J., *Shakespeare's "Hamlet" and renaissance skepticism*, (1995). MF||189||20

46) Robinson, Richard David, *T.S.Eliot's Apprehensions of Incarnation, 1927-1930: Four Ariels and "Ash-Wednesday"*, (1995). MF||189||21



「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ヘレニズム文化」の外にあって、「核の支配が問題になるような現代の科学技術」とは一応切り離された宗教なので、「懐疑主義」に陥ってまで信じなければならない必要性がないのだと考えられる。

ベーコンの「真実について」というエッセイにはモンテーニュを名ざしで引用し、「嘘をつくことは人を恐れ神に対して大胆になること」という趣旨を述べている箇所がある。それなら「懐疑」ではないようなのだが、こういうことを延々と論じるところが「懐疑主義的」であって、いわば「神と一体なら虚偽でも本望」的な狂信をベーコンは排する。そこから一度無神論を経て深い信仰に至る欧米のすぐれた科学者特有の信仰への態度が生まれ、ベーコンはその態度の先駆者となった。

では無神論とも「懐疑主義」ともあまり関らず、全く信仰と無関係に科学技術が発達した我が国をどう捉えればいいのか。これには「まるで目に見えない楽譜を厳密に演奏するように」踊り、演奏する点では我が国の伝統的な音楽や踊りも変わりはないと先述した、グレゴリオ聖歌からオーケストラやバレエに至る西欧クラシック音楽に象徴される「ヨーロッパ精神」の対応物が我が国の伝統にもあることで応えたい。

「核の支配」という国家が関ることに、こうした音楽や踊りが何の関係があるのかということに対しては、まずグレゴリオ聖歌の厳かな響きに、ローマ・カトリックの西欧支配が象徴されること、その対応物として、我が国の声明、宮中の歌会始の和歌の朗詠、そして、国会開会のときに「議長～」と新人議員が長くのぼす発声を考えたい。「厳かな響き」による支配は我が国にもあるのだ。

ベーコンを先駆者とする無神論から深い信仰に至ることの対応物が我が国にあるかどうかは俄かには論じられない。ベーコンの場合は聖書学への反発があって職人の知恵を取り込むまでの思索がある。日本の上記の「厳かな響き」は西欧の聖書学のような系統だったものがないので、それに反発して科学が生まれるとも考えにくい。また白装束で刀鍛冶が仕事をするように、日本の「技術」は一応信仰と結びついていないわけでもないものの、技術そのものは「教義」と関らない。そもそも刀鍛冶の白装束に「教義」はない。「科学」と「技術」を分離し、階級差別をしてきた西欧と違い、日本では始めから「科学」と「技術」に対応するものは一体であった。また日本の場合いわゆる宗教と科学技術の闘争はなかったのではないかと。昨今「科学技術が発達しすぎることの弊害」が注目され、日本の諸宗教の中で比較的教義が整備されている浄土真宗が遅ればせながら「科学技術」を相手に戦いを挑んでいるのが現状だと考えられる。

ベーコンが理想郷を夢見たに近い発展をとげた科学技術立国の国である、ジャズに象徴される「アメリカ精神」の対応物が我が国にあることは論じられる。

東大阪には宇宙開発の夢を持つ工場群とならんで新興宗教施設が多い。この現象が「アメリカ精神」の我が国における対応物であることを説明したい。その前に、もう少しアメリカの博

士論文を見ておこう。

人を救うはずのキリスト教支配に「懐疑」を抱くとき、人は支配を脱して自己を介抱しようとし、まずはヘレニズムを求め、支配の及ばない森などの自然を想い、野生を回復しようとする。その総体が「ヘブライ・ヘレニズム文化」の西欧的特徴だと思う。

古代ギリシャの物語が中世を経て西欧に伝えられ、シェイクスピアに取り入れられ、素朴なキリスト教信仰があるゆえに異教趣味が尊重され、ルネッサンスの人間解放感覚で古代ギリシャ起源の物語にひかれる素朴さがあったのが、啓蒙思想という威信追求で廃れることを指摘する論考<sup>47)</sup>がある。

悪は肉体や世界から来るものであって、自己とは何かを悟ることで悪や苦しみから脱するとするグノーシス派の説を、『ハムレット』『リチャード三世』『モルフィ公爵夫人』『フォオスタス博士』に適用してみる論考<sup>48)</sup>がある。

シェイクスピアの詩句と幽霊、革命感覚の結びつきを論じ、幽霊現出のマシンを造った人物、ブリュメール18日などフランス革命の感覚とマルクス、ナポレオン二世の革命、マクベスの台詞の「最後のシラブル」などを結び付け論じる、シェイクスピアとホラー感覚を連合させる論考<sup>49)</sup>は、やや猟奇的趣ながら、西欧へのこだわりであることは確かだ。

ロンドンの地理学を延長して劇場論を展開し、場所と演劇性の関係を論じるもの<sup>50)</sup>、「フランス便り」ともいえるニュース・クオートーを資料に、シェイクスピアの『恋の骨折り損』マローウの『パリの大虐殺』『タンパレン大王』といった同時代ものを分析し、様式的とも見えるこれらが、意外に事実を踏まえ、事実の持つ単純性を感じさせるとする論考<sup>51)</sup>は西欧に時空を超えて移動するかのようなこだわり具合だ。

シェイクスピアをカトリックと決め付ける。家系をたどりレイディ・ゴディバと親戚だったとまでつきとめる。大陸のカトリックの学校にも行ったとし、エセックスの反乱、ピューリタンとの『十二夜』での関係、カトリックのサウサンプトン伯爵との関係まで論じる論考<sup>52)</sup>がある。これはシェイクスピアをエドモンド・バークにすれば、バークをカトリックと決め付け

47) Robins, William Randolph, *Ancient Romance and Medieval Literary Genres: Apollonius of Tyre*, (1995). MF||189||29

48) Trotter, Jack Eugene, *Another Voyage: The Drama of Gnostic Modernity in Shakespeare, Marlowe and Webster*, (1995). MF||189||30

49) Harries, M., *Scare quotes and reenchanted: Shakespeare, Marx, Keynes*, (1995). MF||189||41

50) Sullivan, Garrett Arthur Jr., *The Theatre and Social Relations in Early Modern England*, (1995). MF||189||49

51) Voss, P. J., *The unfortunate theater of France: Shakespeare, Marlowe, and the Elizabethan news quarto, 1589-1593*, (1995). MF||189||50

52) Enos, Carol Curt, *Shakespeare and the Catholic Religion*, (1997). MF||194||15

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

た偏見のことを連想させる。しかし、だから、パーク、マローン、アイルランド演劇運動、ギャリックとの関係も連想できる。オックスフォード伯爵グループもどちらかといえばカトリックだった点を考え合わせると、英国と西欧の宗教的偏見を生き生きと描き出す論文を米国人が書けることを表している。つまり、それだけ米国は西欧に親和力が依然あることになる。

それは生きる悩みを抱えて西欧近代が持つ「懐疑主義」からの脱却を求めているの精神的な苦闘といえる。それが西欧や日本のように時空を超え歴史を遡って苦闘しているのではなく、現代のリアルタイムの選択としての一面を持っていることがアメリカの特異性である。それもそのはずで、アメリカでは未だにダーウィンの進化論を信じない人々がいる。ということは、そうしたグループの中で生まれ育ち、別の地域に移動することになったら、必ずやダーウィンの進化論を信じるか信じないかで悩むことになる。それはキリスト教の「懐疑主義」であると同時に科学的仮説への「懐疑主義」にもなる。

以上の考察を踏まえ、東大阪には宇宙開発の夢を持つ工場群とならんで新興宗教施設が多い事実話を戻す。「正直さ」「素朴さ」から離れないようにしながら西欧の「知」と格闘するアメリカの博士論文と、町工場のおっさんたちの姿が重なる。「町工場のおっさんたちは俗世間的な夢や、人間関係の愛憎に悩まされる様子はない。すべてを腕一本の技術に賭ける。それが、まず基本的な科学技術イデオロギーではなかろうか」と先述した。けれど「俗世間的な夢や、人間関係の愛憎」と無縁なわけではない。職人の知恵という「大衆の中の小さな英雄」の働きが積み重なって「技術」となるなら、庶民の生きる知恵という「大衆の中の小さな英雄」の働きが積み重なって「生きる技術としての新興宗教」となる。この議論がたまたま東大阪に宇宙開発の夢を持つ工場群とならんで新興宗教施設が多い事実からのこじ付け的な解釈ではないことは、次の事例で明らかだと考えられる。こうした環境から出発し「二股ソケット」の技術を開発し、発展させて大企業とし、同時並行して一種の「新興宗教」の教祖となったのは松下幸之助であった。松下政経塾とPHP研究所を創設し、もはや「新興宗教」とはいえない、国家をある程度左右する勢力になっている。

けれど、だからといって、松下幸之助の考え方が上記の「厳かな響き」と対立するわけではない。ジャズに象徴される「アメリカ精神」はグレゴリオ聖歌とは相容れない。「英雄に拍手を送りたい庶民の気持ち」については、マイルス・デイヴィスの「即興性」を無理にでも強調し、「新興宗教の教祖」になぞらえて英雄視するアメリカと、松下幸之助を庶民の英雄として讃える関西の感覚は共通する。

そうした関西の精神が国家と対立するとすれば「正直さ」「素朴さ」から離れないようにすることそのものかもしれない。グレゴリオ聖歌が象徴するのは長く西欧を精神的に支配するための巧みな統治技術である。それは「正直さ」「素朴さ」と相容れない面がある。大阪商人も巧みな商取引の技術を持つ。しかし「庶民の英雄」を待ち望み、巧みに商取引をしても、根本

的には「正直さ」「素朴さ」から離れないようにするだけで国際的な競争に勝てるかどうかかわからない。

マイルス・デイヴィスが庶民の英雄であるのは演出に過ぎない。その裏にはジュリアード音楽院があって、調性から脱する即興性を確保するには和声と音階の深い知識が必要であり、その知識は西欧クラシック音楽の伝統の上にたつ。いわばマイルス・デイヴィスは裏でグレゴリオ聖歌と結託しているのだ。

シェイクスピア研究で学位を請求する多くのアメリカ人は、シェイクスピア作品という枠を超え、歴史の時空を超え、直接パソコンや周囲のインテリたちが考え悩んだことをそのまま自己の悩みとして苦闘する。その結果出来上がる博士論文は、シェイクスピア＝パソコン説の一步手前であり、聖書時代に戻ってアフガニスタンを攻撃する政府を一度は支持しキリスト教原理主義に救いを求める心理状態を予想させる。

「正直さ」「素朴さ」から離れない「英雄に拍手を送りたい庶民の気持ち」をアメリカ政府は一方では失わない。けれど「核の支配」「ハイテク兵器」ということについて、マイルス・デイヴィスが裏でグレゴリオ聖歌と結託しているのに近い「ヘブライ・ヘレニズム文化」の精緻なシステムを築き上げる能力と、残酷さを継承している。

神秘主義の立場からブレイクがどんな文献を読んだか精査する中で関係ある文学者との関わりを考察し、シェイクスピアについては『マクベス』の「憐れみ」をめぐる分析が、ブレイクの絵とシェイクスピアの関わりにある程度光を当てる論考<sup>53)</sup>がある。ブレイクの神秘主義への傾倒も、キリスト教原理主義のアメリカでの流行と無縁ではないように考えられる。ブレイクも晩年は「新興宗教の教祖」になりかかった側面がある。

最強の将軍伝説という「語り」と深刻に自己を見つめる「語り」との分裂でコリオレイナスが減じたとし、作品の中の様々なレベルの「語りの分裂」を指摘する論考<sup>54)</sup>がある。自己を客観視できない「とっちゃん小僧」が母親らの願いを冷徹に退ける政治感覚がなかった悲劇を主人公の「語り」の観点で分析している。アメリカの「テロ対策」も、世界最強の軍備という「伝説の語り」と、アメリカは自国にしか興味をもたない「自己を見つめる語り」の分裂を、アメリカ大統領が国民に語りかけるときに背負うとも見える。しかし、アメリカ軍が世界最強であることは伝説ではなく事実だという点が『コリオレイナス』とは違う。ただし、大統領ではなく、アメリカ国内の様々な職場で、ヒーローの登場を歓迎する国柄ゆえに、同様の悲劇がある

---

53) Wall, William Garfield, *"Now my lot in the heaven is this": A Study of William Blake's Own Acknowledged Sources: Shakespeare, Milton, Isaiah, Ezra, Boehme, and Paracelsus*, (1997).

54) Munro, Rebecca Bradley Ferguson, *Exploring the narrative split: Shakespeare's "Coriolanus"*, (2003). CR||291||1

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

であろうことは想像できる。

「シェイクスピアの『ねこかぶり』: 性格にまつわる修辭的詩」とでも題名を訳せばいいのか。おそろしく正直なエトスの見地からの論文<sup>55)</sup>がある。シドニーの「詩の弁明」におけるヨーロッパ詩学、ハムレット、マクベス、イアゴ、エドモンドのすべてを、ダブルスタンダードに生きる「ねこかぶり」のキャラクターと、それを支える詩学として認識されるとする。あきれるほどのアメリカ人的馬鹿正直ぶりを発揮した論文である。「正直さ」「素朴さ」から離れない「英雄に拍手を送りたい庶民の気持ち」の現れである。

イラク戦争以後「アホでまぬけなアメリカ人・・・」<sup>56)</sup>といった論評が行われる本質は、こうした「アメリカ精神」の現れではなからうか。イラクに攻め込むブッシュ大統領も、それを批判するマイケル・ムーアも、馬鹿正直に他国の国家を「悪」と決め付け開戦することも、それを馬鹿正直に批判することも、グレゴリオ聖歌の「ヨーロッパ精神」を批判してジャズの「アメリカ精神」で国が成立する体質だと考えられる。

このことは『マクベス』の四幕二場のマクダフの息子が言う「じゃあ誓っては誓いを破る奴らは馬鹿だ、自分たちの方が正直者を叩きのめして絞首刑にするだけ数がいるのに」(Then the liars and swearers are fools, / for there are liars and swearers enow to beat / the honest men and hang up them.) を想起させる。

つまりシェイクスピア作品の中にすでに子供の口を借りてナイーブな二項対立が語られている。「ねこかぶり」と「馬鹿正直」の二項対立はシェイクスピア時代のイギリスにすでに存在して、「アメリカ精神」だけのものではない。

イギリスとアメリカを分けるものは歴史感覚の有無である。この二項対立と歴史感覚との関係を整理してみよう。シェイクスピアは「古代・中世」と「近代」の間にあって、「近代」の扉が開かれたばかりの位置にある。作品も薔薇戦争を主題にした歴史劇から、争いを内面化し、「生か死か、それが問題だ」で悩む近代人創出へと進化してゆく。

「赤薔薇をシンボルとするランカスター家と、白薔薇をシンボルとするヨーク家が、互いに自分の領域だといって争う」イングランドを描き、「運命を耐え忍んで朽ち果てる生き方と、運命と刺し違えて死ぬ決意をする生き方が、互いに自分の領域だといって争う」人間の内面という領域を描き、近代人創出に至ると言い換えられる。

近代的な二項対立の範疇には、この「沈思黙考か行動か」以外にも、本稿で取り上げた「情熱と理性」をはじめ「記憶と忘却」「自然と人工」などが入る。

問題は「支配と被支配」である。

---

55) Curtright, Travis Robert, *Shakespeare's dissembler: The rhetorical poetics of character*, (2003).

56) Moore, Michael, *Stupid White Men ...and Other Sorry Excuses for the State of the Nation!*, (2001).

この二項対立が「古代・中世」的な薔薇戦争の対立にも、近代的な内面の対立にも現れるところがシェイクスピアの詩句の魅力ではなからうか。

つまりヨーク家がランカスター家に支配されるように「人間」が「情熱」の奴隷になる。「記憶」が「忘却」に支配され、「自然」が「人工」の奴隷になる。内面の葛藤を描く近代以降の作家は多くとも、シェイクスピアほどの迫力がないのは、シェイクスピアの持つ「古代・中世」的なエネルギーがないからではなからうか。シェイクスピアにそれが可能なのは、薔薇戦争とハムレットの内面の葛藤とを、同じ手法の発展で描写したためだと思う。

ここに天候の良し悪しという「二項対立」が加わる。

先述の「夜と朝とが互いに自分の領域だといって争う時刻です」という句の魅力について、「夜」が何を表し、「朝」が何を表し、どこに「古代・中世」的なエネルギーと近代的な内面の葛藤の重ね合わせがあるかを論じるのはむずかしい。

比較的分かりやすい例として『ヘンリー六世第三部』の五幕三場にエドワード王が戦況を太陽の照りかけりに喩える台詞がある。バーネットの戦いに勝って幸先良さそうだが、チュークスベリーの戦いに向かうに際して、太陽に暗雲が立ち込めそうだと言う。それをクラレンスが少しの風で吹き払えと言う。

この例のほかにも、歴史劇で王を太陽に喩え、王の武運や王権の進展を太陽の光に、それを妨げる障害を暗雲に喩えたものは多い。「太陽と暗雲」という「古代・中世」的な二項対立は、『ソネット集』に持ち込まれると、内面の葛藤の比喩になる。

ソネット33番はもっぱら日の出の美を讃えることで始まる。山の頂を照らし、牧場を照らし、小川に朝の太陽が当たって、さざなみがきらめく様を天から「錬金術」が施されたと形容する。やがてその太陽は黒い雲に覆われるといった、太陽の照りかけりについての記述が続き、天の太陽が曇れば地上の太陽（あるいは息子）もかけるといった結尾で終わる。

このソネットは美少年の不倫に対する詩人の気持ちを歌ったと一般に解釈される。けれど、その太陽の比喩と薔薇戦争は無関係ではない。たとえば詩の中に「勝利の輝き」(triumphant splendour)という言葉がある。この言葉とモーティマーズクロスの戦いでヨーク側が勝利し、王になる前のエドワードと、ジョージ、リチャードの三兄弟を表す三つの太陽が夜明けに幻視されたとされる「輝く太陽」(the sunne in splendour)を結び付けられないわけにはゆかない。

微妙な恋愛心理の葛藤が「市民戦争」(civil war)として描かれることはソネット35番にはつきりそれと言及されている。この「市民戦争」とは、内面の葛藤描写であると同時に、歴史劇の薔薇戦争の名残を否定できない。

この微妙な恋愛心理の葛藤と、薔薇戦争のような武器をとっての戦争をつなぐのは「嘘つきか正直者か」という二項対立である。つまり恋愛心理で相手の不倫を許すか許さないかという葛藤は、武器をとっての戦争で、勝った相手を反逆者として処罰するか、負けて自分が反逆者

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

になるかの二者択一になる。先述の『マクベス』の四幕二場のマクダフの息子が言う台詞も、その前半にマクダフが王位についたマクベスを裏切って国外逃亡し反逆者になったことを踏まえていて、権力者＝正義の人＝正直者に対し、敗者＝反逆者＝嘘つきという政治的なレッテル貼りがあることを踏まえている。「勝てば官軍」「東京裁判」といったことを連想せざるを得ない事項なのだ。

つまり国家反逆の罪で自分か相手かどちらかの首がとぶことと、不倫の罪で恋人を糾弾するか逆に自分の罪をみとめ謝罪することが同一の感覚で捉えられるのがシェイクスピアの世界ということになる。これは、直接英国のこととしてイングランドの歴史やルネサンスの恋愛感覚を理解してかかろうとするより、日本やアメリカという周辺から理解した方が理解しやすい面があると思われる。

微妙な恋愛心理の葛藤と、薔薇戦争のような武器をとっての戦争をつなぐことは、我が国の歌舞伎でも行われた表現だと考えられる。「義理人情の相克」「忠と孝に引き裂かれる葛藤」である。これらは「勝てば官軍」「朝敵の汚名だけは避けたい」という戦前まであった我が国の感覚から遡って整理できる。

要するに関が原の合戦後に石田三成の首をとばすにせよ、幕末に近藤勇の首をとばすにせよ、切腹も許さず首を切るには必ず「朝敵の汚名」が着せられていた。そして「朝敵の汚名」を着せる基準は曖昧で「勝てば官軍」の法則しかない。関が原でもし西軍が勝てば徳川家康に「朝敵の汚名」が着せられ首がとんだかもしれない。つまり薔薇戦争が英国の王冠の争奪戦であったように、我が国の国内での戦争は概ね倫理的、心理的なものを含めて「錦の御旗」争奪戦であったと考えられる。

そのことと歌舞伎が描く義理人情の相克が基盤にある生死をかけた恋愛模様は無縁ではない。義理とは忠孝の道であり、それは庶民から天皇に至る我が国の倫理体系であり、「錦の御旗」が体現するものなのだ。「国家反逆の罪で自分か相手かどちらかの首がとぶことと、不倫の罪で恋人を糾弾するか逆に自分の罪をみとめ謝罪することが同一の感覚で捉えられるのがシェイクスピアの世界」と書けば理解を絶している印象を与えるかもしれない。

けれど例えば歌舞伎「河内山」での河内山宗俊が活躍する世界は、茶坊主が寛永寺の使僧に化けて松江公の横恋慕をたしなめるという、まさに「国家反逆の罪で自分か相手かどちらかの首がとぶことと、不倫の罪で恋人を糾弾するか逆に自分の罪をみとめ謝罪することが同一の感覚で捉えられる」世界である。そもそも我が国の戦前までの倫理体系は家族制度を根幹とし男女の「情」のコントロールを最重要視していたのだから、「不義密通」はお家のご法度であり「国家反逆の罪」でもあった。国家反逆と恋愛心理の結合は、まず「不義密通」を主題にする我が国の歌舞伎で普通のことであった。

こうした我が国の「嘘」「正直」の二項対立について、米国からのアプローチに話題を移す

前に、ヨーロッパとの関連を考えておこう。『夏の夜の夢』など人間が動物に変身することを「人間の領域外れ」を表わして領域拡大が起こったとする米国学位論文の論考<sup>57)</sup>がある。これは西欧の深い森と人間の関係を想起させる。

同時に西欧の深い森と我が国の戦国時代武田信玄や織田信長が争った山国の森の深さを考えさせられる。間諜がゆきかい、小さな勢力が大きな勢力を制することもある謀略と山と森の地形が織り成す世界での「嘘」「正直」の二項対立があって、政略結婚が絡む国家反逆と恋愛心理の結合がそこにあった。西欧も同じ状態が長く続き、共同体の存続を危うくさせる「敵」を「人間の領域外れ」とする考え方も育った。『マクベス』の結末もヴァーナムの森がダンシネーンの丘に攻め寄せることで終わる。

次に米国を考える。我が国の「錦の御旗」に「米国流民主主義と市場経済原理」を代入すれば、これまで論じてきたことと同様の理解が成立するように思われる。イラクに攻め込むブッシュ大統領も、それを批判するマイケル・ムーアも、馬鹿正直に他国の国家を「悪」と決め付け開戦することも、それを馬鹿正直に批判することも、「アメリカ精神」の現れではなかろうかと先述したことが、ここに関る。

つまりアメリカがときどき戦争を仕掛けて維持する核による世界支配と、支配される側の反応は、「勝てば官軍」「朝敵の汚名だけは避けたい」という戦前までであった我が国の感覚に酷似している。大多数の国々は「米国流民主主義と市場経済原理の敵という汚名だけは避けたい」と願う。そしてアメリカが意を決して戦争を仕掛ける相手は「米国流民主主義と市場経済原理の敵」なのだ。そしてベトナムは、アメリカが仕掛けた戦争を戦い、アメリカに勝ったという理由で、もはや「米国流民主主義と市場経済原理の敵」ではない。「勝てば官軍」の側面がある。米国の競争尊重の価値観から「朝敵の汚名」は「米国流民主主義と市場経済原理の敵という汚名」であり、競争原理における「負け犬の汚名」ということでもある。勝てばこれらが払拭され、ベトナムは一部市場経済原理をとりいれてアメリカの観光客を受け入れるまでになっている。

このことと関連させて、『ヘンリー六世』や『リチャード三世』から予言的(黙示録的)言動を分析し、ジャンヌダルクやリチャード三世にやられた女性たち、王の死を嘆く兵隊の言葉などを例として挙げ、ホロコーストやベトナム戦争との類似関係も指摘する論考<sup>58)</sup>を考えれば、シェイクスピアのこの観点での現代性が浮き彫りになる。ベトナム戦争の泥沼化、ホロコーストの反動としてイスラエル建国とアメリカでのユダヤロビーの活躍、イラク戦争の泥沼

57) Shutz, Andrea Kadi, *Theriomorphic Shape-shifting: An Experimental Reading of Identity and Metamorphosis in Selected Medieval British Texts*, (1995). MF||189||5

58) Hatcher, R. R., *Prophecy and apocalypse in Shakespeare's first tetralogy*, (1995). MF||189||25



化を含め、世界の惨状とシェイクスピア作品を結びつけた論考になる。

このことと恋愛との関係は、英米の政治家の色恋沙汰スキャンダルでの失脚、ジェンキンスと曾我ひとみ夫妻の問題など具体的には多々あるものの、我が国を含めるためにシェイクスピア作品のモラルと歌舞伎のモラルを平行して考えるには民主主義原理そのものについて考察の必要がある。

民主主義が成立するには政治家の説明責任が大切になる。嘘のない人格を持つ個人が競い合い、選挙で選ばれた人々が嘘のない政治を行うのでなければ民主主義は成立しない。シェイクスピア時代にすでに民主主義が英国で成立していたとまではいえぬものの、その傾向は確かにあった。その倫理とシェイクスピア劇との関係が、演劇を取り巻く社会の倫理が演劇の根幹をなす倫理になるという意味で、義理人情と歌舞伎との関係に対応すると考えるべきではなからうか。

歌舞伎で描かれる恋の場合、二人は絶えず義理人情を気遣い、その倫理性は国家反逆につながることを意識し、それゆえに命を懸けた恋になる。それと同じく民主主義国家の恋は嘘がない恋であることが必須なのではなからうか。そうでなければシェイクスピアが描く恋の馬鹿正直さの説明がつかない。同時に英国には立憲君主制があって、「嘘も方便」といったフィクションを是認する風潮もある。それがソネット138番の主題である。

同じ立憲君主制といっても我が国は決して皇室を英国のような意味でフィクションと考えるわけではないと思う。少なくとも昭和三十年頃までは決してフィクションではなかった。それは死刑制度についての昨今の混乱と当時との比較に現れている。少なくとも昭和三十年頃まで、死刑囚は死刑を通告されると親族が集まり水杯をかわし、粛々と死刑執行に服した。ゆえに、死刑執行の前日までの本人への通告はなされ、現在のような抜き打ちの執行もなければ、法務大臣の署名拒否も取り沙汰されなかった。

それは天皇の命による死刑という、やや宗教的な絶対性を帯びた価値観があったからではないか。これは、米国学位論文で、肉親の死への想いも研究動機にして、煉獄の概念を中世からシェイクスピアまでの文学に見る論考<sup>59)</sup>を想起させる。この論考はキリスト教信仰が素朴に発露し過ぎる点が米国的かもしれないものの、西欧にこだわっていることは確かである。

つまり西欧と米国と日本には、やや宗教味を帯びた価値体系を、フィクションとはせずに、そのまま素朴に信じる要素がある。これと対立するのが英国の王室観と階級意識ではなからうか。

英国の場合、王室だけをフィクションとするだけでなく、階級制度全体をフィクションとみ

---

59) Murphy, John Lancaster, *The Idea of Purgatory in Middle English Literature*, (1995). MF||189||18

なし、人間の平等を意識し、階級性は仮に主人と召使の役割を演じるだけといった、演劇志向のフィクション感覚がある。

それは薔薇戦争で互いに相手の系統の世継の首を切り落とす争いをやりながら、一般国民に迷惑をかけず、国土が疲弊しないモラルにもつながる。「素人衆には手を出さない」モラルがあるヤクザの抗争に近かったと先述した。その結果、英国の階級性は、王室を議会決議ですげかえられ、その構造全般がフィクションと意識される、やや不安定なものである。むしろ、その不安定さゆえに、下位に位置するものに上昇の希望を与え、階級性が生き延びてきた。

日本の立憲君主制は、戦後華族を廃止し、天皇と皇室の政治的権限を憲法で制限しているだけであって、フィクションであることを意識した階級性が存在するわけではない。またアメリカの民主主義には階級性を認める考え方も、階級性をフィクションとする考え方も存在しない。英国がフィクションとして不安定な階級性を、国家体制として、あえて意識的に受け入れたのは王政復古の瞬間であったと考えられる。清教徒革命で王様の首を切り落としたときは、こうした柔軟性から最も遠いところに英国がいたときではないか。その時期を経て、まるで科学者が無神論を経て深い信仰に至るように、英国は英国流の国家体制を見出した。

同時に、カンタベリー大僧正が大きな発言力を持つので政教分離が一見十分でないように見える英国の国家体制が、事実上政教分離を果たし、キリスト教の宗派对立が直接国家体制に介入する余地を排除した瞬間でもあったと考える。

先述したように西欧諸国は一度極端な形で国が宗教に支配され、それを否定する革命を行った歴史がある。これに対し、アメリカはピルグリム・ファーザーズの建国神話を抱いたまま、一度も宗教の支配を否定したことがない。このことは(c) 西欧文化全体と関わるものへのアメリカからの憧憬という本稿、本項目を考える上で本質的に重要なことではなかろうか。

脱宗教化が十分なされていないから、アメリカは国家として「古代・中世」から「近代」へ脱皮していない疑いがあるのだ。先端的な科学技術と市場経済を使ってもなおアメリカは「古代・中世」の精神性を残している。だからこそ「近代」の思索と「古代・中世」のエネルギーを併せ持つシェイクスピア作品の「古代・中世」のエネルギー部分に切り込む迫力を米国シェイクスピア研究学位論文が持つのではないか。

ソネット55番の愛の永遠性を中心にヨーロッパ詩学の伝統で論じ、ネオプラトニズム論も援用される論考<sup>60)</sup>がある。問題にすべきは、このソネット55番の大半は戦争を描写していることである。戦火を生き延びる愛の永遠性なのだ。アメリカからヨーロッパへの憧憬を問題にす

---

60) Schwartz, Louis, *Old love's great power: mimesis, imitation, and the authority of poetry in Petrarch, Wyatt, and Shakespeare*, (1989). 931||Sch9||Ol

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

れば、戦争について考えざるを得ないのが、その特徴だといえる。脱宗教化が十分なされていないがゆえに「古代・中世」のエネルギーを残し、硝煙反応のあるヨーロッパ詩学への憧憬ともいえる。

